
緋弾のARIA 五分間の最強

昼夜逆転

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 五分間の最強

【Nコード】

N4295V

【作者名】

昼夜逆転

【あらすじ】

俺は、別に何の力もない。力があればそれに見合うだけの働きをしなければいけないと知っているから。

だが、俺は持ってしまったている。

ハンドレッドパワー 五分間身体能力を100倍にする力。

神崎・H・アリア。

武偵高に入れ？ あたしとパートナーを組め？

ほらみる。変な力を持つちまったからこんな 馬鹿みたいなこと

に関わる羽目になるんだ。

一話 銀行強盗

人生は目立たないのが一番だ。

だから、俺はずっとひそかにこっそりと生きてきたのだが、今日の俺 まつしまやうじ 松島京は一味違った。

俺、というより世界がいじわるしたんだ。

現在、銀行強盗が立て籠もってる現場に直面してます 人質として。

両手両足を縛られ、通信道具も没収された状態で。
俺の周りには、他の人質もいる。

全員がここに集められていて、一人の銃を持った覆面男 背丈で判断した が下卑た笑いをあげている。

犯人はグループで他に二名ほどいる。

全員銃を持っており、動けば一発でバンツ！ だ。

さつき、ここの警備官が立ち向かっていたが格闘技もできるのか、あつさりとやられていた。

歯向かった奴がどうなるかの見せしめに腹に銃弾も撃ち込まれていた。

早く治療しないとどうなるか分からないが、警察の面々もこの現状に手をこまねいていた。

武偵も到着が遅いようで つーかたとえ来たとしても人質を解放しない限り打開は無理だろう。

まあ、俺は知ったこっちゃない。

目立ちたくない俺をこんな目立たせやがった犯人グループは憎いがどうこうするつもりもない。

みんなが怯えている中、一人だけつまらなそうにしていた。

犯人は警察に逃走用の車を用意しろと要求していたが、中々それ

が先に進まず、怒っていたようだ。

犯人が威嚇のためか天井に数発弾を撃ち込む。

もちろん合わせたかのように人質は悲鳴をあげている。

あつ、俺はそんなびりじゃないから悲鳴なんてあげていない。

というより親父が拳銃持つてるような仕事をしていて、結構慣れている。

テレビの中の映像のようにじーと見ていた。

犯人はそれが気に食わなかったのか、俺の髪を掴みあげた。

ぶちぶちとハゲへの道を辿るような嫌な音を出しながら男の気持ち悪い覆面と視線を交差する。

あまり汚い手では触られたくないもんだ。

「さつきからテメエーはきにくわねえーなっ！」

覆面がなければつばがかかるとような声のあげかたに俺はため息をつく。

「人の髪引つ張っても毛、伸びねーぞハゲ」

「ハゲてねーよ！」

「じゃあ、覆面とってみろや。見せてみろよノットヘアー」

「んだ、見せてやろうか！」

突然覆面を取り外そうとした男に仲間が慌てて止めに入る。

「もしも、顔が映ったらやばいって。それより、例の。こいつにしましよーよ。見せしめに」

見せしめ？

何だ、逆らった奴に銃弾打ち込む奴か？

まあ、俺ならいいか。

打ち込まれる前に能力を使えばダメージはないしな。

今俺と言いついていた男がこの三人のリーダーなのだろう。

残りの二人が敬語を使って話しているところを見るに断定できる。

随分と馬鹿なリーダーだ。

俺なら間違いないくこいつの下にはつかない。

リーダーらしき男は途端嘲笑うように鼻を鳴らす。

「そうだな。おい、てめー外にしろ」

両足が縛られている相手に向かって何を言っているんだこいつは。

「おつ、とうとう人質解放する気になったか。んじゃ、足の縄解いてくれ。血が止まって壊死しそうだ」

「ちげーよばあーか。これからお前は見せしめに殺すんだよ」

周りにいた人質は全員が息を呑む。

俺が血みどろになって死ぬ姿でも想像したのか。

涙を出して、気絶した奴までいる。

他人の死に対してどれだけ敏感なんだこいつらは、そんなに敏感に反応してたら生きていくのが大変だと思うね。

当然びびるだろ？　んー？　といった感じでリーダーは顔を寄せてくる。

鼻息が荒いのは怒りで興奮しているのか。

それとも俺が魅力的過ぎるので興奮しているのか。

後者なら今すぐ走って逃げ出す。

覆面という固定された表情が近づいてくるのは若干の恐怖を感じ

るんだが、俺だけか？

「あつそ、じゃあ、外まで歩いて行ってやるから、縄外せ」

およそ人質の態度ではない言い方で返す。

「あり？　なんでびびってねーんだ？」

「別に死ぬのに恐怖感じてたら生きてらんねーだろ。おら、さっさとしろ」

これは嘘偽りない気持ちだ。

俺は自分の持つているある能力で人知れず人助けをしていた。

中には犯罪者と戦うような場面も何度も切り抜けてきた。

そんな人生を送っていると死への恐怖など薄れてしまっている。

それは危険なこともかもしれないがどうでもいい。

「つーか、なんでてめーが上から目線なんだよ」

愚痴りながらも、せっせと縄を解くこいつは中々ドレイ根性が座っている。

やっと解放された足を数度動かして、動く事を確認。

「んじゃ、てめえら行ってくるが、くれぐれも人質を逃がすなよ」

男が俺に銃を突きつけながら歩いていく。

そして、止まっている俺にぶつかる。

「歩けよっ！」

「あー殺す前にできれば俺の鞆に入ってる仮面を取ってくれとうれしいんだけど」

その仮面は普段、人助けをするときにつけるものだ。
顔をばれると色々面倒だからな。

「あー？ まあ、死ぬ最後の願いぐらい叶えてやってもいいか」

「じゃあ、山盛りのたらこスパゲッティが食いたい」

俺の小さな夢を述べると、

「黙れよ。おら、仮面だ。ってこれ、昔やってたアニメ『顔面ライダー』のお面じゅん！」

語尾が囁んでいたのは驚きからだろう。

顔面ライダーは、仮ライダーが売れているのを知り、どっかの会社がパクったものだ。

文字通り顔面だけで悪い敵を倒す、キモキモチワルイで有名だ。
女が語尾とか囁むと可愛いなと思うが男が囁んでもキモイのなと思いつつ、俺は自慢げに伝える。

「死ぬときはそのお面つけて死ぬって決めてたんだ」

「なんか、かつこいいー！」

変なところで息があってしまった。俺は嘘半分なんだが。

もしかしたら、人を傷つけるようなことをしない場面でこいつと知り合えていたら友達くらいにはなってやったかもな。

俺は仮面をつけてもらい、自動ドアまで歩いていく。

「ここがいい」

男は自動ドアからでるギリギリの場所で俺の頭に拳銃を突きつけながら、叫んだ。

結構いかした拳銃だが、生憎そっちの知識は皆無に等しいのでかっこいいと言っ事はできない。

「おい、のろま警察！」

外で構えていた、警察に叫ぶ。

全員瞬時に隣の男にそれぞれが持っている得物を構える。

のろま？ ああ、確かこの強盗は警察に逃走用の車をもってこいと交渉していたな、と思い出す。

確かにあれからまだ、二十分程度しか経っていないと思うが。

警察側は時間を稼いで武偵の到着でも待っているのかもしれない。それを警戒してこの男は早めに脅しにかかったのか。

意外と考えてるんだな。

「ここにいる、まだ中学生の男は、おまえら警察がのろまに行動しているせいで死にまーす」

中学生と名乗った覚えはないが制服で判断したのか？

熱がりな俺は冬でもワイシャツで過ごしているので、中学生かどうか見極めるのは厳しいはずだ。

何も考えずにこいつ言ったな。

「ま、待て！ もうすぐ、車は届く！ 早まるな」

警察の場を指揮する人は慌てたように叫ぶ。

周りからのカメラのフラッシュが半端ない。

……テレビに映っちゃうのか。

それは嫌だが、仮面をつけていて正解だった。

龍多ははぁ、と息を吐いたあと、空を見上げた。

ああ、空が遠いな。

「それじゃあ、よい旅を」

男が引き金を引くのが見える。ゆっくりとした、俺の恐怖心を仰ぐようなのんびりさだ。

それが完全に引かれるよりも先に、俺は能力を発動させた。

ハンドレッドパワー　五分間身体能力を百倍にする　を発動させた。

二話 解決

俺は引き金が完全に引かれる前に能力を発動させた。

ワンテンポ遅れて、拳銃が煌めき、弾が放出されたのが見える。遅い。

俺はそれを首を振り動かして避け、その流れのまま縄を切り解放された腕で男の顔面に拳を入れる。

加減はしたつもりだったが、それでも三十メートルくらいは飛んでしまったようだ。

御愁傷様。

俺は祈りを捧げた。

死んではいけないと思うけど、もしも死んでたら俺が犯罪者か。

呆気にとられたかのように静まり返る場。

視線が集まる、外、中から。

そりゃそうだ。

誰だって、目の前で殺されかけてた奴がいきなり、殺そうとしていた奴をぶっ飛ばした状況を見れば。

驚くさ。

俺は銀行内を見る。

たぶんみんな、恐怖で俺の仮面を被る前　素顔なんて気にもかけていないはずだ。

中にいた男二人も、外の連中同様驚いていたが、反射的にこちらに拳銃を発砲した。

正直こちらでよかった。

人質のほうに闇雲に発射されたら、申し訳なさ過ぎる。

俺は銃弾を掴み、握りつぶす。

「ひいつ！　化け物だ！」

「逃げられるかよっ」

俺が軽く動けば、発砲してきた男の目の前。

逃げ出そうとしていた、覆面の上からでも分かる恐怖の色を感じたが、問答無用で拳を入れる。

さっきよりも弱くやったが、壁にめりこんでしまった。
まじ死ぬなよ。ギャグみたいな感じで終わらしてくれ。

「う、動くなっ！」

のん気にそんなことを考えていたら、最悪の事態に。

最後の一人が膝をかくかくさせながらも人質に拳銃を向けていた。
さっき俺が考えていた通りのことが起きてしまった。

というか、外にいる奴らは何もする気ないのか？

麻醉銃でも持ってねえの？

それを一発撃ってくれりゃいいのに。

俺は降参とばかりに両手をあげる。

男は俺の様子に満足したように、もう片方の手で近くに転がっている拳銃を拾う。

「動くなよ……黙って撃たれるよ」

まあ、いい。

この銀行の屋上に続くと思われる階段から足音がする。

完全に消えてはいるので普通の俺なら分からないが、聴力だって半端ない。

だから、挑発する。

「早く撃てよ。手が震えてる腰抜けさん」

人を殺す恐怖か、俺に対する恐怖かは知らないが、中々踏ん切りがついていない男を急かすように言う。

男は銃口を俺の頭ではなく心臓に向ける。

先程リーダーが避けられているのを見たからかもしれない。

まあ、俺も頭が体なら体のほうがあたりそうだしな。

使ったことなんてないからなんとも言えないが。

「うわああああ！」

男はなぜか悲鳴を挙げながら引き金を引いた。

俺はそれを動きもせずに直撃して、後ろに倒れた。

こうしておけば、後は階段のほうにいるだれかがどうにかしてくれるだろう。

生憎、時間切れだ。

銃弾を喰らった後に俺の身体強化 ハンドレッドパワーは消えてしまった。

だからこそ急かしたんだけだな。

これは五分間身体能力を百倍に高めるが、使ったら再使用までは十分経たないと使えない悲しい能力だ。

なぜ、俺にこんな力があるのか。

そんなもん知らんし、知りたくもない。

知って変なものを背負ったりするよりは自分で力の使い方を考えたほうがよっぽどましだ。

俺は人助けのためにこの力を使う。

そう、決めた。

階段から降りてきた 足音は半端なく消していたが、俺の身体強化時にばつちり聞こえていた おそらく救助にきたと思われる

……ちっこい女だ。

いや、女だからとか、ちっこいからとかで偏見を持ったりはしてないが……大丈夫だよな？

と、そんな心配はいらなかった。

一瞬で男を締め上げて事件終了。

女は全員の縄を解いて解放して、俺の方に歩むよって来る。

中に警察が入ってきていろいろやっている。

音は俺の首の脈を触ってきたときに、ひやりとした女の子のぷにぷにハンドにぞくつとして、慌てて立ちあがる。

いやー、恥ずい。

女に対して面識がない俺にとって軽く触れられるだけでも反射的に避けてしまうのだ。

「あんた、生きてたのね」

人の首の当たり触って脈があるか調べていたくせにその言い草は何だ。

「当たり前だ」

俺は腕時計を確認する。

能力が切れてから、現在まだ五分程度しか経っていない。

こいつから逃げるにはあと五分は必要だ。

「あんたが、あの二人倒したんでしょ？ どうやって？」

能力が使えるようになったら即座にこの場を離れよう。

面倒事は嫌いだからな。

中に警察が入ってくる。

警察は神崎さんとか呼んでいるから、たぶんこいつの名前は神崎ほにやらなのだろう。

神崎、ね。

確証はなかったし、目の前で犯罪者を捕まえるまで信用できなか

ったが、ちっこい女は武偵のようだ。

神崎は警察と色々話しているので、俺はこっそり逃げようとする。

「君は、武偵なんだよね？」

警察の一人がそう言うてくる。

説明も面倒だ。

第一、一般人だと言った場合何が起こるか予想できたもんじゃないので逆らわずに流れに身を任せよう。

長い物には巻かれろって言うし。

意味は少し違つかもしれないが。

「ああ、ずっとチャンスを窺っていたんだ」

適当に合わせて終わりにしよう。

武偵という証拠は持っていないので、深く尋ねられるとまずいで警察の人たちからよりを置く。

というかこっそり抜け出し、銀行から出ると待ち構えていたかのように報道陣が近寄ってくる。

こいつらは、何もしないで面白いネタだけを取ろうとするのか。いらつく。

それが仕事だと分かってはいるが……好きにはなれない。

「名前は？」

他の被害者のほうに行つてやれ、といつてもそれどころじゃないか。

「あんたに名乗る必要はない。俺はあんたらみたいな奴らは嫌いなんだ。失せろ」

俺の怒りを滲ませた声に怯むが、それでも自分たちを犯罪者たちのように殴ることはない、と思っっているのか。構わずにマイクを突きつけてくる。

時間が十分経った。

殴り飛ばしてやりたい衝動をなんとか堪え、能力を発動　させようとしたら、さっきのちっこい女が近づいてくる。

「ああ、ちょっとこいつに用があるから、あんたたちどっか行っとなさい」

女はそう言っ、俺を銀行内に引き戻す。

そのままで屋上まで、連れて行こうとしたのでぱんと手を叩いた。^{はた}

「俺は家に帰りたいんだが」

「あんた、武偵でしょ？　報告書書く必要あるんじゃないの？　送ってくわよ」

たえそうだとしてもあんたの力を借りるつもりはないと俺は言おうとしたが、下手に波を立てると面倒そうなので、

「違う」

「えっ？」

否定すると途端に目を丸くする。

そこに畳み掛ける。

「俺は普通の学校に通う普通の人間。あんたらのような拳銃振り回

したりする危険な人間じゃないんだ」

基本、関わり合いたくない奴には冷たくあしらうようにしている。そうすれば、大抵嫌悪の目で見てくるからな。

俺のひそやかな人生は、他人を怒らせることで成り立っているのだ。

そんな性格が嫌な奴と誰が友達になりたい？

だから、俺はひっそり暮らせるのだ。

目の前にいる、いかにも厄介ごとを持つてきそうな奴は余計に冷たい態度を取るのだ。

「あんた、武偵じゃないの？ すっごい強かったじゃない」

「あれは、武道を習ってるからな。護身術みたいなもんだ」

もちろん嘘だ。

誤魔かす方法としてはこれはなかなか使い勝手がいい。

「日本の武道はすごいよね……」

素直に感心した様子は俺が望んでいたのとは違う。

日本の、つてことはこいつは外人か。

確かに髪の色はカメラリアでとても日本人とは思えない。

不良というわけでもなさそうだし。

異常に日本語がうまいのでそっちの線は完全に考えていなかった。

「あんた、武偵になりなさい」

突然で、指を突きつけてきたので俺は一瞬拳動が遅れる。

「アンタ、何年？」

「中学三年だが……」

素直に答えてからしまったと口を押さえる。

相手は武偵なのだ。

どんな小さい情報でも与えたらこちらのすべてを知られるのだ。
これは俺の学校でそんな話題があったからの知識で、正しいかどうかなんて分からないが、あながち間違ってもいないと思う。

「じゃあ、今年、東京武偵高に入学しなさい。分かった？」

「……分かん。勝手に人の人生を決めんなよ。俺は平凡に過ごす、陰みたいにな」

「あんたには才能がある。それを棒に振るような真似はあたしが許さない」

一方的に言うと、仮面を外そうと手を伸ばしてくる。

背伸びして回避すると、ぴょんぴょんと跳ねてるのだ、

可愛いなこいつ、犬みたいだ。

しばらく俺が楽しんでいると、むーと唸り顔を赤くする。

「あんたの素顔を見せなさいよ！」

ああ、そうだったな。

こいつは俺の素顔が分からないんだ。

つまり、ここで逃げてしまえば問題はない。

「俺は武偵になるつもりはねーからな」

能力発動。

俺は神崎の手を振り払う。

負けじと神崎は抱きついてきたが、それもひらりと避ける。

微かに尻に手が当たった。この変態め。

俺は一気に階段を駆け上り、屋上にでたら、思いっきり跳んだ。

身体能力百倍だぞ？

通常時でジャンプして一メートル飛べれば単純計算で百メートルは跳べるんだ。

つまり、逃げる事に成功したわけだ。

だが、これが俺にとっての不幸の始まりだと気づいたのは家に帰ってからのことだった。

三話 メインと後半番外編が入るといふ謎の話（前書き）

とにかく、謝ります。すみませんでした、と。

三話 メインと後半番外編が入るといふ謎の話

家に着いてから分かった事があります。

その前に、俺は財布に学生証を入れる中々優等生なのです。

そして、財布は基本後ろのポケットに入れるのです。

つまり、何がいたいかと言いますと……。

微かに当たった神埼の攻撃は、俺の後ろポケットにヒットしていたのだ。

狙ってやったかどうかは知らないが、その攻撃で俺の財布はポケットからドロップしました。

最悪の状況を考えるなら、神埼にその財布を拾われた可能性があるということだ。

むしろそこら辺の不良にでも拾われているほうがよっぽど幸いだ。

「ほら、夕飯の時にぼうとしない」

俺の母親が、俺が石像のようになったのを注意する。

テレビでは俺のテンションを下げるかのように夕方の事件のニュースが流れていた。

それを見ていると、手柄はすべて神埼の物になっていた。

俺という存在はあまりにも情報が少ない事から、省かれているようだ。

神埼・H・アリア。

海外の武偵局に所属しているらしいが、今日は日本に用があったらしく、さらに偶然にも近くに居合わせたことから事件解決に協力したらしい。

偶然、偶然と俺に不幸が重なりやがった。

マジで、外人だ。日本語うまいから日本にはよく来るのか？

そんなことはいい。すぐにロンドンに帰還しているのなら別にい。

向こうで、忙しい毎日を過ごしていれば俺という存在はすぐに忘れ去られるだろう。

だけど、もしも日本に滞在して、俺を探すなんてことがあったら。その可能性も捨てきれない事がなによりも恐ろしい。

あいつはなぜか俺に興味を抱いていた。
学生証という手がかりと、財布に入っている店のポイントカード等。

二つ合わされば、俺の名前と学校がばれてしまうのも時間の問題だろう。

最悪住所さえもばれる。

「二人とも、気をつけなさいよ」

近くで起こった事件に対して、母さんは疲れたようにため息を漏らす。

俺と妹まいの二人のことだ。

妹まいというのは妹の名前だ。

松島、妹まい。妹まいと書いて妹まいと読む。
なんともまあ、単純だ。

「ねえ、お母さん！ 私武偵になりたいっ！」

妹はいつも、こんな事を言っている。

武偵はとても危険ということが母さんの頭にはこびりついているので、いつもノーと答えている。

「なんで、女の子がこんなこと言って、男の子の京は喧嘩一つしないのよ。性格逆なんじゃないの？」

母さんがぶつぶつ文句をたれている。

母さんからみたら俺は大人しい優等生。妹は喧嘩好きのやんちゃ娘に映っている。

「京^{きやう}が武偵になりたいのなら、止めはしないけど……」

「その言い方だとすごい俺を追い出したいみたいだな」

俺は忘れられちゃたまったもんじゃないので、会話に参加する。

「男の子は少しくらいやんちゃなほうが可愛いだよ。あんた高校は？」

「適当に、近くの進学校に行くよ」

俺の答えが気に食わないのか、「かあっ！」と叫んだが、無視する。

「まったく、父さんは今も武装検事として頑張ってるのに……子は意思を引き継がないのかねあ」

はあと年甲斐にも頬に手を当て、ため息を吐く。

俺は親父が大変そうなのをみてるから、武偵なんてやりたくないんだ。

あと、銃火器はこえーし。

それに妹が意思引き継ぐき満々だろ、俺じゃなくていいだろ。

「お母さん！ お父さんだって昔武偵だったんでしょっ！」

妹はここぞとばかりに食いかかる。

それにしても、今日はいつにもまして、食って掛かるなあ。
無駄にテレビに触発されたからかも知れないな。

「だから、あんたは女でしょっ！」

母さんも古い考えを持つてるからいつもこんな平行線の会話。
妹はびしっとテレビを指差す。

「神崎・H・アリアさんだって女の子だよっ！」

テレビに映っている女の子 見た目の割りに俺と同年の
を指差す。

俺はぶつと口に含んでいた麦茶を噴出してしまった。

「兄さん汚い……」

妹の冷たい視線に心を傷つけながらもティッシュで拭く。
忘れてた。

俺の問題が何一つ解決していない事に。

「あんたどうしたのよ」

母さんも冷たい視線は大して気にならない。
拭き終えた俺は、夕飯の片づけをして、

「俺はもう寝るから……」

自分の部屋に行きたかった。

この先、どうなるか、俺は不安で胸がいっぱいだった。

メインストーリーが短いので主人公の人助けをかいたストーリーを書きました。

以下メインストーリーとは関係ないので読みたくない人はバックを進めます。

妹の友達が家に来るらしいので会いたくない俺は街に繰り出していた。

そして、公園のベンチで風船を木に引っ掛けた子がいたのでそれをとって渡してなりゆきで一緒にいたら誘拐された。

助けて終わり。

今日の日記は終了。

なぜかこの日記を妹が見たらしく、なぜそんな状況になったのかを激しく聞いてきたのでリアルタイムで話そうではないか。

俺は公園で遊んでいる元気そうな子供たちを激しく睨んでいた。

理由は先程買おうと自販機で財布を開けたら、中から小銭が零れ落ち、総計514円が自販機の下に入ってしまった取れなくなったか

らだ。

ハンドレッドパワーを使って取ってやるうかと思っただが余計に高くつくのでやめた。

ベンチでうな垂れていると、一人の少女が俺に涙目で近寄ってきた。

「こ、怖いお兄ちゃん！」

怖いのに、こいつは俺を侮辱するようなことをいうとは中々肝が据わってやがる。

俺はそれでも相手が少女なので優しく「なんだよ」と言ってやる。

「木に風船が引っかかっちゃったから……」

なるほど。

子供が指差すほうに視線を送ると、俺よりも少し高い木に風船が引っかかっているのが分かる。

俺の身長ならジャンプすれば届くな。

「と、取ってくれたら何でもしますから……お願いしますっ！」

涙目で俺に懇願する。

なんだか俺が泣かせているようで嫌なので頭を掻き毟り立ち上がる。

木の前に行き、ジャンプ。

あっさりとれたので拍子抜けな感じもしないではないが……どうでもいいか。

「ほら、もう離すなよ」

少女に風船を渡すとぱあっ。

満面の笑みを咲かせる。

可愛らしい笑顔はこいつの将来は美人になると表しているようだ。

「ありがとうございます！ 怖いお兄ちゃんっ」

子供の無垢な笑顔は癒されるが、それだけに無垢な言葉は俺の心臓へのダメージがでかい。

「怖いって……そんなにか？」

「はい。目がこうずばばーんて鋭くて、ぼぶぶーんてとがっていました」

子供の感性には啞然とするしかない。
なんだずばばーんて。いや、それはまだいいがぼぶぶーんってなんだよ。

想像ができない 俺は泡でも吹いていたのか。
口をそれとなく拭ってみるがそんな様子はない。

「お、お兄ちゃん聞きたい事があるんだけど……」

途端しおらしくなる。感情の起伏が激しいのは子供の特権だ。
俺は面倒ながらも話に耳を傾ける。

「私……遊ぶ人がいないんです。だから遊んでくださいっ！」

「断る」

「ええっ!？」

なぜ、そこまで驚くのか知らないが断った理由は俺がガキのおも
りなぞできないと思うからだ。

暇してるので断らなくてもいいのだが……気分的に嫌だ。

「そうですか……私の事は遊びだったんですね」

「待て待て。なぜお前みたいなお小さい子がそんな言葉を知ってるの
かを聞いただしたいが……そもそも俺とお前は今始めて会ったんだ」

「実は前世が恋人同士だったかもしれないですよ？」

「電波だ。電波がいる」

見たところこの子は小学校低学年くらいだろう。

なのにここまで言葉を知っているとは。俺なんか小学校の頃は高
校があることも知らなくて中学で勉強は最後だと思っていたぐらい
なのに。

「あなた、お風呂にする？ 私にする？ それとも、こ・は・ん？」

「やっぱり子供なんだな」

いい間違いをしたのはわざとかもしれないが疑い出したら止まら
ないので、何も言うまい。

「それじゃ、遊ぼつ」亜祖母。日増し照る。

少女は、少女らしからぬ力で俺を引っ張ると公園から連れ去って
いった。

街にでた俺は薄い財布をさらに薄くしていた。

「……てめえ、いい性格してんな」

俺の横でアイスを舐めている少女は嬉しそうに目を細めている。
俺の金で食っているアイスだ。さぞかしうまいことだろう。

「お兄ちゃん、ありがとっ！」

「俺の事怖いとか言っておいてよくもまあ、たかれるな」

俺がもし街中で怖い奴を見かけたら話し掛けずに避けるぞ。

子供は人の心の機微に鋭いとか聞いた事がある。

もしかしたら俺の事は最初から怖いとは思っていないでふざけて
たんじゃないか？

「次は、パフェ食べたいっ！」

「なるほど、俺はお前を殴っていいのか？」

「一生のお願いですっ！」

「どうせまた使っただろ？」

「うんっ！」

にぱあつと子供らしい無垢な笑顔は人の悪い考えを浄化させる力でもあるのか。

奢ってもいいかなという気持ちにさせられそうになるが、必死に首を振る。

「それより、親は？ 又は家は？ 送ってください」

時間は昼に差し掛かる。

昼ごはんを食いに戻ってもいい時間だ。

だが、少女は悲しそうに目を伏せ、

「私の家、両親が急がしいんです。だから、家に帰ってもいるのは使用人だけです」

シヨウニン？

……もしかしてこいついいとこの穰ちゃんなのか？

それも使用人がいるレベルだ、かなりのものだ。

俺はさっきまでの行いを思い出し……特に無礼なところはなかったなと思い、なぜだか気まずい空気が流れる中、口火を切る。

「それでも待つてくれる人がいんだから帰れよ。その使用人の人はお前のためにご飯を作ってくれてんだろ？」

「はい、です」

「だったら帰れ」

俺は悲しそうに、縋るようにしている少女の顔を見ずに告げる。

俺は女に甘いらしい。本来なら人に何かを奢る事のないドケチな俺がアイスなど奢っているんだからな。

「分かりましたです……」

やはり寂しそうにしているので、妥協案をだす。

「午後だ」

「え？」

「午後、さっきの公園に來い。遊んでやるよ」

パフェは奢らないけどな、と付け足す。

俺の言葉を理解したのか。

真っ暗だった道に光が見えたように希望に瞳を輝かせ、

「ありがとうございます！」

飛びついてきた。

ほのかな少女、ではなく女と表現したほうがいいような香りが鼻孔をくすぐる。

腹部にあたる少女の胸は……少女の割にはそれなりの大きさだ。妹よりはあるかもしれない。

最近の小学生は発育がいいと聞くが、ここまでとはな。

ロリコンが見たら喜ぶのか、悲しむのか分からんな。

ホールドを外す。

多少恥ずかしさを感じたのはなぜだ？ 俺は小さい子が好きなのか？

「分かりました。それじゃ、帰りますっ！」

「ああ、送ってかなくていいか？」

ここは人通りが少ない、夜に歩けば不良が沸くような危険なところだ。

今も人が一人もない。

もう少し考えて進行方向を決めればよかったな。

普段から人がいないところを好む俺の悪い癖かもしれない。

「大丈夫です。家はでかいんでどこにいても分かります」

この街にはでかい家は結構あるが、大丈夫か？

まあ、間違えても誰かが面倒を見てくれるだろう。

さすがに人通りのあるところまではついて行こう。

後は適当でいいや。

と、樂觀的に構えていたら……後ろから殴打された。

頭に激痛が走り、俺はぎりぎり少女に倒れ掛からないように体をずらして倒れた。

「お兄ちゃん！」

「ガキはこっちに来いっ！」

俺を殴ったと思われる男 スキンヘッドの頭に斬り傷があるいかにも男だ。

さらに、後ろから黒塗りの車がやって来て、男が少女を車に連れ込む。

誘拐か？

少女はいいとこの人みたいだし、くそ。

俺は警察に連絡しようと携帯を取り出す。

本当はハンドレッドパワーを使ったほうがいいのかもしれないが、

人質をとられている。

一撃で仕留められなければかえって少女を危険に晒してしまう。すると、男は窓を開け、馬鹿にするように笑い飛ばし。

「警察に連絡しても無駄だぜ。そつちとは大量の金を払う代わりに見逃してくれるように交渉してるからな。正確にはこのガキの身代金の半額だぜつ。ひゃっはっはっは」

嘘かほんとかは分からないが、そうらしい。

俺はすぐさまカメラモードに切り替え、車を取れるようにしておく。

番号もついてるしな。

「じゃーな」

「お兄ちゃんっ！ 大丈夫っ！？」

中から少女の心配する声が聞こえる。

……お前は自分の心配をしてくれよ。

窓はしまり、車は俺を馬鹿にするように去っていく。

やばい、頭が。

しっかりと写真に収めたが。

殴られた場所が悪かったのが激痛が走り考える事ができない。

眩暈がする。

ハンドレッドパワーを使ってもこんな状態じゃ意味がないな。とりあえず、少し休憩だな。

ジ・ハンドブック……

三話 メインと後半番外編が入るといふ謎の話（後書き）

京「なんだ、あの後半は」

作者「いやーメインストーリーが思いつかないし、でも短いと読者に対してなんか無礼というか」

京「俺が読者ならあの後半のほうが無礼だぞ。しかも完結じゃないし。なんだ最後の次回に続くじゃなくて、ジ・エンドって。俺が死んだみたいじゃないか」

作者「また、メインストーリーが短いときにあげようかって」

京「忘れてると思うがな」

作者「まあ、そのときは作者がジ・エンドですね」

京「せめて、英語で書け。後覚えておいてもらえることを祈っておけ」

作者「はい、祈ってきます」

四話 アリア強襲（前書き）

8月11日まで用事があり、更新できそうにありません。

四話 アリア強襲

次の日。

「兄さん、朝食出来たって」

ドア越しに妹の声がしたので、俺は制服に袖を通す。

昨日はたまたま上着を着てなくてラッキーと思っていたが、結局意味のないことだったな。

下りて朝食を摂り、学校に向かう。

いつものように後ろをひよこひよこ付いて来る妹に言い放つ。

「俺は先行くぞ」

「あつ、待ってよ」

妹の返事なんぞ微塵も聞かず、俺は学校を目指す。

道中、昨日のことを思い出していた。

もちろん、神崎・H・アリアのことだ。

それにしても……顔を見たのは初めてだったから驚いたな。

妹の話を聞く限りでは半端なく強い人間というイメージしかなかったたので、すっげえむきむきな女を想像してたんだけどな。

性格は大体予想通りだったが。

そんなことを考えていたら教室にたどり着いたので自分の席に座る。

クラスみんなは受験勉強に励んでいる。

中には前期に合格している人もいるが他の人に迷惑をかけないように本を読んだりと自分の世界に入り込んでいる。

俺は前期試験を受けるつもりはない。

小論文の練習とか面接の練習とか無駄に時間が増えるのが嫌だったからだ。

それに前期で受かると変える事ができないのも嫌だ。どうせ、後期で受かるから俺は特に深いことを考えてはいない。志望校今のレベルから二つ分くらい落とした場所を選択しているからそこまで力を入れて勉強はしない。

楽にしたいためではない。

ちゃんと大体の人生設計はできている。

ランクを下げた高校でトップレベルの成績を取りつづけて、国立、公立の大学に推薦で入学。

後は自分のやりたい仕事 小説家 を目指しながらサラリーマンとして働く。

俺の人生はそんなところだ。

みんながせつせと勉強するのを尻目に、俺はノートを開く。

昨日の銀行強盗のネタはあまり参考にはならないがメモしておくと、ネタノートに書いていく。

これが普通、俺の普通だ。

大きすぎず、小さすぎない夢を追いながらの生活。

十分でもない、かと言って不十分でもない人生。

俺の能力はおまけのようなもの。あまりほしくはないもの。

そう、そんな人生設計で愉悦していた時に。

『三年二組の松島京くん。校内にいましたら至急校長室まで来なさい。繰り返します……』

一斉にこちらに視線が集まる。

普段俺に関わる人間はいないと言っても過言ではないほどにいないが、やはり人間。

問題が起きると気になるようだ。

しかも、優等生の俺だからな。

学校の成績も常にトップレベルの俺だ。

そんな奴が一体何をしたんだという視線が鋭く突き刺さる。

それでも、「何したんだよ」と軽口を叩いてくる奴が一人もいないのが俺の中学生生活を最も顕著に表しているだろう。

メモノートをしまい、席を立って、教室を出る。

普通職員室に呼ばれるのに校長室に呼ばれたことから、俺は大体俺が呼ばれた理由を理解していた。

教室をでて校長室があるのが二階で、俺の教室は三階だ。

一つ階段を降りて、校長室に向かおうとすると。

「兄さんなにやったの？」

妹がいた。

妹は息を切らしているので、廊下を走ってきたことが分かる。

「しらねえよ。それより何で、お前がここにいんだよ」

「いや、兄さんの話題ってクラスで話すと人気だね。聞きに行けって言われたんだ」

お前は兄を笑いの種にして友達と交流しているのか。

今度から俺に何か面白い出来事があっても話すのはやめよう。

妹に対して心を僅かに閉ざした俺は「早く教室に戻れ」と吐き捨てるように言って校長室に入った。

中に入ると、ちっこいピンクに近い髪をした少女　俺の予想通りの女子が偉そうに座っていた。

大体、予想は出来ていたし、覚悟もできていた。

それでも、いざ突きつけられるとやはりショックを受けるものだ。

「久しぶりね。松島京」

ひらひらとからかうように財布を振る。

なんか軽そうに見えるのは気のせいだと思いたい。

大きなカメリアの瞳をこちらに向ける小さい女。

妹とあかりの憧れである、女　神崎・H・アリア。

二人に聞かされた話が奮い起こされる。

今まで犯罪者を逃がしたことがない。

『双剣^{カドラ}双銃のアリア』という二つ名を持っていること。
などなどだ。

嫌がる素振りは顔には出さず、首を傾げて、演技する。

「あんたはちよつと出てなさい」

近くでおろおろしていた校長に向けて言い放つ。

なんて強気なんだこいつは。

そして校長もおどおど出て行くな。

いや、正直こっちのほうが話しやすいのはあるが……でもなあ。

とりあえず、これは既に負け将棋のような物だと割り切ろう。

校長室に備え付けられたふかふかのソファに腰を下ろし、神崎を見据える。

「突然、僕を呼んだけど、どうしたんですか？」

昨日と口調を一変させ、おどおどと気弱そうな振りをする。

唯一残った、こちらの手札　顔がばれていないこと。

昨日と様子が変わってしまえばもしかしたら騙せるかもと1%程度は思っていたが。

「いきなりキモイわ。普通にしなさい」

欠片も無理だった。

いや、分かっていたが。

「あ、あの、何と勘違いしてるんですか？」

それでも、演技を続けようとした俺。

ここまでくれば意地に近い。

「あんた、なに言ってるのよ」

さすがにここまで来ると、神崎も多少は疑惑の目で見てきた。
怪我の功名という奴か。

確かにこのまま演技をするのはつらい。

それでも、それを押し通すだけの度胸は俺にはあるのだ。

「もしかして……兄と間違えたんですか？」

俺はいもしない兄の事を話し出す。

実際、騙せるとは思ってたない。

ただ、単にこいつをからかうと言うことにシフトチェンジしただけなのだ。

それにしても興味津々とはかりにこちらに顔を寄せてくる。

だから、俺は深刻そうな振りをして語りだす。

「僕の兄はヒーローに憧れてて、人を救うのが好きなんです。双子の兄ですごい似てるって言われるんですけど……僕ってちょっと体細いですよね？」

「そうね。もしかして、名前も同じ？」

そうねって何だ。こいつは人の嘘に何頷いてんだ。
下を向き笑いを堪えながら続ける。

「読みは同じです。漢字は違いますが……」

僕は　と俺は狂^{ウケ}とポケットからだしたメモ帳に書き込む。
神崎はふむふむと関心したように頷いている。
こんな名前やだなあ。何か狂いそうだな。
というか何で人の嘘にこんなに真剣そうに聞いているんだろう。

「じゃあ、この学生手帳は？」

例のブツを取り出してくる。

俺は「あっ」とわざとらしく声をあげ、

「兄さんのだっ！」

俺のだ。

「それをどこで拾ったんですか!？」

さらにわざとらしく突っかかり、神崎の肩を揺らす。

神崎は「やめなさいよー」とビブレードの聞いた声で言う。

「昨日拾ったのよ。ああ、昨日の銀行強盗事件知ってる?」

「はい」

現場にいましたから。生中継でしたから。

「そこで、その狂って奴が現れて二人の銀行強盗を倒したのよ。それで、もしかしたらこいつなら私のパートナーになれると声をかけたら……」

「かけたら？」

「逃げられたのよ。咄嗟に抱え込もうとしたけど、あっさり逃げられてその時に落としたりしいこの財布だけが手がかりのよ」

「そうなんですか……」

いかにも残念そうに声をもらす。

まじで噴出しそうだ。誰か時間止めてくれ。そして、大笑いした後にもうまた動かしてくれ。

「ねえ、あんた兄弟なんでしょ？ 家にはいないの？ ていうか学校は？」

「……兄さんは中学三年になってから突然『俺はヒーローになるぜっ！』とかほざきながら家を飛び出して、今日までずっと帰ってないんですよ」

「め、迷惑な兄ね……」

おいこら、今迷惑って言っただろ。

目の前にいるんだからな。よく心に留めておけよ。

「そう、なら、どうしようかしら……？」

おっ、なんかいもしない存在を探す事を始めているぞ。

なんだ簡単に誤魔化せるじゃん、俺演劇の才能あるねと思ってる
と。

「じゃあ、ちよつと名簿調べてくるからちよつと待ってなさい。い
ろいろ聞きたいことがあるから」

……笑いが止まらないぞ。

神埼が一生懸命教師に『松島狂っていますか？』って聞くんだぞ。
ちよつと待て、松島^{まつしきまよう}狂っていますか？って振り仮名振らずに書くと、
松島、狂^{くる}ってますかになるじゃねーか。

こんな名前嫌だね。

それはおいといて、もちろん言葉なので教師は字が分からないの
で、俺の事を言ってるんじゃないかと思えない。

そんなわけの分からない言い合いが繰り広げられる。

想像しただけで笑いがこみ上げてきそうだ。

校長室を出て隣にある職員室に神崎が入ったのを確認して、俺は
笑いまくった。

転げまわったよ、ぞうきんがけのように。

そして、笑ってる最中に。

「アンタ……よくも、騙してくれたわね……」

肩を怒らして顔を真っ赤にして拳銃を両手につて……拳銃。

この学校はお前の通ってる学校とは違って、拳銃なんてものない
んだぞ。

あんまり簡単に抜くな。

「騙すって何がですか？ ば、僕は何も……」

「狂なんていないわよ！ あんたが騙したッ！」

振りかぶり、発砲。

それは威嚇ようなのか、後ろにあったタンスのようなものにめり込む。

……高そうだけど、いいのか？

俺が心配していると、続けざまに走ってくる。

速い！

一瞬で目の前に現れたかと思うと、拳を振りぬいてくる。

なんとか、それを勘で避けたが、その腕は急に方向転換して俺の腕を掴み、思いつきり投げられる。

背中から床に叩きつけられた。

受身なんて器用な真似、する暇もなく。

これが、武偵か。

ますますなりたくないね、なんで妹はこんなになりたいんだ。

「あんた、あたしを騙して恥をかかせて……怒ったっ！」

言わなくてもさっきの気迫を見せられれば分かる。

俺が痛む背中を押さえながらからだを起こすと、第二ラウンド開始とばかりにまた迫ってくる。

さっきとは違い、俺は避けるではなく掴んだのだが、それでもこまのように回転して腕を振りはらわれ、回転の勢いのままに蹴りを入れられ、止めにまた投げられた。

先程よりもコンボがつながりやがった。

拳銃を使わないのは致死性のダメージを与えないためか。そんな配慮ができるなら、こんなことはやめてくれ。

「はやく立ちなさい。あんたはドレイよ。ドレイ！ あたしに一撃加えるまですっとうとうしてやるんだから！」

一撃？ いれてやるぞ。

最初の一発はまあ、こちらが悪い事したからおあいこと思って甘んじて受けた。

二撃目は少々いらつきながら、これで完全にちゃらだからなと攻撃を受けた。

が、三撃目はないだろ。

俺は能力を発動させる。

見た目に変化はないが、今の俺はさっきまでに比べ百倍強い。

神崎が走ってくるのがゆっくりと見える。

こっちも投げ飛ばしてやると、俺はカウンターに専念していた。

最初のときのよう拳をいれてこようとするのを俺は避ける。

次に掴みかかってくるのも予想済みだ。

避けようと思えばすべて避けられた。でも、全部避けなかったの

は、次のためにだ。

神崎が俺の腕を掴んで最初とまったく同じように投げ飛ばす。

俺は着地の瞬間に両足で踏ん張り、ベンチのように水平で持ちこたえ。思いつきり立ち上がり、神崎の腕を掴んで、同じように投げた。

一応女なのでソファに向かったが。

「いてえな、おい。くそ」

身体強化で治癒能力もあがっているので、擦り傷程度はすべてなくなっている。

それでも、内部にはダメージが残っているのだ。

能力はまだ続いているが、闘う必要もないだろうと、構えをとく。

「あんた……あたしのドレイになりなさいっ！」

なぜか、ソファから跳ね起き、そんなことを言ってきやがった。

意味が分からないが、聞いても意味はわからなそうだ。

「ドレイってなんだよ……」

「そのままよ」

そのままだと理解に苦しむんだが……。

そこら辺をまったく理解していない神崎は顎に手を当てて、そこから辺を歩き始めた。

帰っていいか？

俺は傷ついた校長室のドアに向かおうとした瞬間に腕を掴まれる。ちゃっかりしてんな。

「あんた、銃は使えるの？」

「使えねーし、この先使う予定もない」

聞いたくせにまったく聞いてはくれない自分勝手さにため息が出た。

「やっぱり基礎程度は学んでおいてもらわないとよね……戦闘能力の高さは十分だし、うん分かったわ」

何を満足しているのかは分からないが、なんだか雲行きが怪しい。良くないことが起こりそうだ。

今も最悪だが、さらにだ。

「あんた、高校はどこいくつもり？」

「近くの進学校だ」

「じゃあ、変えなさい。東京武偵高よ」

「似たような会話を前にもしたような気がするの俺だけか？」

「とにかく、分かった？」

話を通じない。

何度も否定しているが、それも通じないようだ。

否定がだめならここだけは従って、違う高校に行けばいいだろう。
まだ、後期試験までは申し込みは終わっていないので、変えることも可能だが武偵高なんて危険な場所には行きたくない。

拳銃・刀剣の携帯が義務付けられているとか妹が嬉しそうに語っていたのを思い出した。

刀剣はまあいい。腕の延長だと思えば。

ただ、拳銃は嫌だ。

一番嫌な記憶は中学生に上がりたてに父親がすごい強い拳銃
確か、デザートイーグル の使い方を教えてくれて、そして、
派手に頭にぶつけたことがあるのがトラウマだ。

あれやべーな。

撃った瞬間、拳銃が俺を殺さんばかりに向かってきて頭に直撃し
たんだよ。

相手を倒すのか俺を倒そうとしているのか分からなかったよ。

幸いたんこぶ程度で済んだんだけど、あれが色濃く残っていても
ういやだ。

「あー分かった、分かった。武偵高ね、おーけーおーけー」

「釘刺しておくけど、もしも武偵高じゃなかったら、昨日の件についてあたし言いふらすから」

……なんという脅しだ。

俺にはこの脅しを崩す言葉が見つからない。

だって情報が少なすぎるから。

神埼・H・アリアの言葉の力がどれほどまで人に信用させる事ができるのか。

俺はその情報を入手しない限り、結局苦勞する道を歩まされる。

時間だつてすでにあまりない。

こいつはそれをすべて考えて言ったのか？

そろそろ、願書を出さなきゃいけない。

もしも、もしも、すべてを考えて言ったのなら、こいつは……頭がいいのかもしれない。

「分かつた……」

頷くしかない。

はつきりと答えを出すのは後でもいいかもしれないが、それでも武偵高に受けなければいけないかもしれない。

母さんに言ったら喜ばれるだろうか。

親父は泣いて喜び、そして恐怖のデザートイーグルを俺にくれるかもしれない。

物凄い、嫌だ。

「あたしは色々用があるから一年の三学期から、そっちに編入するつもりよ」

「は？ 俺を無理やり誘つて、そっちは自分のやりたいことやんのか？」

「……今のあんたは使い物にならないわよ。戦い方を身につけてか

らじゃないとアンタあたしのドレイなんだからそのぐらい分かりなさいよ」

「おう、おう、わーったよ。それじゃ、約束は守る。武偵高に入学すりゃいんだろ？」

「そう、簡単じゃないと思うけど、そうよ」

神崎はそれだけが言いたかったのか、満足したように部屋を出て行く。

誰が、ドレイになんてなるかよ。

俺は仮に武偵高に入ったとしても、のほほんと暮らすからな。

こうして、嵐は去っていき、その後の校長室で俺はすべてを神崎の責任にして教室に戻った。

五話 武偵に俺はなる！

帰ってから、神崎について調べられることを調べているうちに、武偵という仕事に興味を抱いていた俺がいた。

元々、人助けは好き　というか人に喜ばれたりするのは好きだ。武偵は、金をもらい武偵法の許す範囲で仕事を行う、何でも屋という存在だ。

戦ったりするだけが仕事でもないようで、それはそれでいいなと思えた。

はつきり言わせてもらおう、武偵高に行きたくなったのだ。

これは神崎の脅しとか関係なしに。

将来小説家となり有名になる俺だ。

いろいろな事を知っておくに越した事はない。

というわけで、家に帰って部屋に引きこもっていた俺は、今日が家族全員が集まる日と言う事であるのも後押しするきっかけとなり、家族に　妹は呼んだ覚えがないのだがなぜかここにいる　集まってもらい全員が集合したのを確認し、宣言する。

「俺、武偵高に行く事にしたから」

あっけらかんと言うと両親は目を丸くし、互いに顔を見合わせる。妹はなぜか嬉しそうに笑っていたが、なんだ。俺が死ぬ姿でも想像してるのか？

「神崎さんに会ったらサインもらってきてね！　観賞用と保存用と実戦用と自慢用の四つねっ」

お前は俺の心配をしてくれ、あと既に会ってるからな。

もっと早く言ってくれば……いや面倒だからやめておこう。
というか、そんなもん友達に自慢しても大した自慢にならないだ
ろ。

武偵界ではそれなりに人気があっても普通の世界じゃ神埼ファン
なんてそんなにいないだろう。

「うおおおおおおおー！ さすが俺の息子おおー！」

親父が感涙の涙を流している。

き、汚すぎる。

大の大人がこんなガキみたいなことをやっていていいのだろうか、
いやよくない。

俺にこの人の遺伝子が流れていると思うと悲しい気分になってく
る。

「あなた、とうとう京の胸に正義感が生まれたのよー！」

お父さんとお母さんが抱きしめあっています。

なんとなく距離をおきたいです、はい。

それでも、本当に心から嬉しがってくれている素振りを見せる二
人を見た俺の心は。

嬉しそうな両親を見るのは悪くはないという嬉しさがこみ上げて
いた。

それでも、嬉しがっているのがばれると恥ずかしい俺はふんと鼻
を鳴らし、

「俺はそれだけを伝えたかったからな。少し勉強してくるから」

「待つんだ。後で俺の部屋に來い」

途端に真面目な声をだし、こちらに顔を向ける。

こういつときの親父は八割方俺に面倒なことが起きる前兆だ。俺は、嫌な予感を感じながらも返事する。

「だったら、今から行きたいんだけど」

面倒事は先に片付けたいんだ。

ショートケーキのイチゴは後に残すタイプだからな。

面倒なスポンジは先に食べるのだ。

「そうか。母さん。夕飯は豪華にできつか？」

「そうだねー。今日は京の旅立ちだからね」

旅立ちといわれるとあの世への旅立ちなんじゃないかと考えてしまふ俺は武偵高を恐れすぎなのだろうか。

臆病が悪い事ではないと言っておきたい。

「ちょっと、買出しに行ってくるよ」

母さんは「よっこらせ」と年寄り臭い声を出して、買い物に出かける準備をし始める。

「私、学校の友達に自慢しよっ」

それで友達がいなくならないことを切に願う。

考えてみる。自分の友達の兄が拳銃振り回すような学校に行くんだ。

普通、怖くて近寄りがたくなるだろ。

あと、下手に学校に知れ渡らないことを祈るだけだ。

止めないのか？ と聞かれたら、止めないと答える。

無駄なんだ、あいつが一度言ったことは絶対に実行する。

だから、武偵にあいつもいつかはなるはずだ。

二人を見た後、親父が動き出したので、後を追う親父の部屋に踏み入れる。

親父は知り合いに武器を作ったり、メンテナンスをしてくれる奴がいるのでほとんどすべての武器をそいつに預けているので、この部屋は武器庫と化してはいない。

前見たときは酷い有様だったのでよかったと一安心していると。親父は何か探し始める。

「じゃんじゃじゃーん。俺は昔からずっとお前に渡そうと思っていた物があるんだ」

タンスの一番下から、何かを取り出していた箱だ。

渡されるとずしりと重みが手に伝わってくる。

……嫌な予感しかない。

「名づけて、デザートイーグル！」

それまんまだろ名づける必要皆無だろ。

中を開くと恐ろしい、トラウマを復活させる拳銃 デザートイーグルが顔を見せた。

「俺はな、別に拳銃を持ち歩くつもりはないんだよ」

身体強化さえあれば、拳一つで戦うのなんて屁でもない。
使用時間に制限はあるけど、気をつければ大丈夫だと願いたい。

「武偵高は拳銃はつねにもちあるいてなきゃいけないぜ?」

痛いところを突かれたが、まだ俺は入学してないんだ。

今から帯銃する必要性もない。そもそもしてはいけないと思うんだが。

それに、

「俺は銃とか嫌いなんだよ」

「なんでだよ。いかすじゃねーか。いっつグッドラック!」

「……俺は時々あんたが父親なのかどうか疑わしくなるんだが」

「それより、理由はなんだよ?」

あんたが馬鹿なこと言っつて脱線したのにそれよりで片付けやがった。

まあ、いい、いつものことだ。

「こんなもんで簡単に人の命を奪えるからだよ。こんなもんは発明されなきゃよかったんだよ」

いつも思う。

便利になれば、それを悪用する奴がいる。

これはもう世界の公式であるかのように起こりうる現象だ。

「確かに銃は簡単に人の命を奪えるかもしれないけどよお。逆もあるんだぜ? 俺はこの銃のおかげでたくさんの命を救ってんだからな」

それでもやつぱり親父は大人だ。
子供っぽい性格は合ってもな。

理想論のような言葉で言い返してくる。

ただ、その言葉だってそもそも救った命を脅かしたのが銃かもしれない、と考えたりはしないのだろうか。

それでも、親父は屈託のない笑みで言うんだ。

たぶん俺が今思ったことを口に出しても「難しい事わかんねーよ！」とか言われて終わるのだ。

俺はデザートイーグルを握り、重みを感じる。
人を救う事をできるという重みを。

「それな、俺の友達に頼んで馬鹿みたいに改造したからな。もしも使ってるのばれたら即逮捕レベルにな」

「いらんっ！　こんなもん！」

「大丈夫だって、一応、『銃検』は通ったしな」

「『銃検』？」

「この銃使っていいよってことだ」

なるほどな。なぜ、逮捕レベルのものが認められているのかは問
いただきたいが藪蛇だ。

何がでるか分かったもんじゃない。

「簡単に説明するとそれ、デザートイーグルを元に完全に作り直したから正しくはデザートイーグルじゃないぞ名前。言うなれば……
ニューデザートイーグル！」

「そのまんま再びかよ……」

「フルオートは三点バースト、マガジン増量により弾は十五発入るからな」

「ふ、フルオート？ 三点バースト？ マガジンは分かるけど凄さは分からないんだが……」

「フルオートはトリガーを引いている間はずっと弾がでるってこと。三点バーストは一度引いたときに三発弾が飛び出るってことだ。通常のデザートイーグルは七発だ」

単純に倍ってことか。

残りののは使えるのか分からないが。

それにしても、改造ってそんなことできるのか？
むしろ俺はそっちの方面で武偵を目指したいな。
なんか危険少なそうだし。面白そうだし。

「威力は？」

単純にあの恐ろしい反動さえなければ嬉しいなと思い、訊いたのだがすぐに聞かなければよかったと後悔した。

「一発がデザートイーグルの倍くらいだな」

「俺の頭に拳銃が埋まるじゃねえか！」

単純計算であの衝撃も倍ってことになるはずだ。

そんなもん、喰らったら、俺は一人餅つきを始める事になるぞ！？

「そもそも、フルオートとか三点バーストとか意味あるのか？ 弾の消費が早くなるだけなきがするが……」

「いや、俺が可能な限り強くしてくれっていったらそうだったんだ。威力も半端ないから当たり所によっては防弾服着てても死ぬかもね」
けらけら笑うこいつの顔に拳を叩き込んでもいいかと神に尋ねている。

神の許可は下りそうもないし、下りたとしても親父に攻撃を当てられるか疑問だらけだが。

「せめて、威力だけは下げてくれよ……」

そんな物騒なもん持ち歩きたくもない。

「ええー。まあ、俺も悪ノリしちまったけどさ、しゃーねー。後で頼んでくる。他に欲しい物あるか？」

どうせ使うなら、拳銃はあれがいいな。
なんだっけ……なんかのゲームでできた。
ガンブレードについてた気がすんだが。

確かその主人公が最初に使ってた武器がリボルバーだった気がする。

リボルバー式拳銃とかいうのがあるんじゃないか？

「リボルバー式がいい」

「却下」

「なんでだよ！」

即答された親父に詰め寄るが、親父はちつつちつと指を振る。

「リボルバーは護身用の方がいいんだ。確かに使いやすいという奴もいると思うが襲う　強襲になると自動式拳銃　オートマチックのほうがいりる便利なんだ。まあ、俺の自論なんだけどな」

親父が頭良く見えるときはこういった拳銃に関するとき、戦闘などだけだ。

ただ、拳銃の知識は俺なんかよりも何倍も多いので親父が言う事を真に受けるなら正しいのだろう。

心配な面がないわけでもないが。

「だったら、デザートイーグルはやめてくれないか？　見ただけで頭の中に昔の映像が……」

さらに飛躍して、撃った瞬間に頭部に拳銃が埋まるまで進化した映像が今横切った。

「昔？　ああ、俺が適当に教えたときのか」

「俺は今あんたを殺したいほど憎んだんだがいいか？」

一瞬で親父に掴みかかる。

親父はいやあと頭をかきやがるので余計に俺の怒りを増幅させる。

「あん時は悪かったな。まあ、気にすんな」

「気にしまくってんだよ！」

「うおっ！ 反抗期っ」

「今の状況はどんな温和な奴でも切れるわっ！」

本当に親父といると体力を使う。

友達なんていないから分らないが、友達がいるとこんな感じなのかもしれない。

それを親相手に感じたくはなかったが。

「わーったよ。んじゃ、夕飯できるまでは俺が稽古つけてやろうじゃないか」

「本気でやっていいのかよ？」

家族で唯一俺の能力について知っているので不敵に笑って見せると。

「いくら百倍されたからってな、それだけじゃ、俺には勝てねえぞ」

「んじゃあ、やってやる」

俺は憂さ晴らしにちょうどいいと思いながら外に向かった。

五分後にはぶっ倒れていたぜ 俺が。

番外編 三話の続き メインストーリーとは関係ありません。読まなくても聞

とりあえず四日ほど書けない分一気に書きました。

誤字あるかもしれませんが報告してくれると嬉しいです。

メインストーリーとは関係ないので読まなくても問題はありません。

「わあ、大人が道路のど真ん中で寝てるっ!」

俺が道の真ん中で大の字の態勢で寝てると、子供の声がした。
大人……?

俺は中学生だが、身長がでかいから間違えられたのか。
ここは人通りが少なく、交通量も対してないような場所だ。
なぜ、この道を通ってるかは知らないがちょうどいい。

「子供、俺が1000円やるから、ちょっと手を貸してくれ」

「えっ! いいのか! よし、待ってる!」

子供はそう言う俺を一生懸命引っ張り起こしてくれる。
よほど、1000円がほしいのか俺は起き上がることが出来た。
眩暈がしてたがそれも落ち着いてきた。

「ほら、1000円だ」

財布から1000円をとりだす。

「やったあっ!」

ひゃっほーと元気がいい。

1000円で喜べるなんて子供という生き物はすごいな。

「ああ、そっだ」

「ん？」

「お金を上げるからちょっとついてきてとか言われてもついてったら駄目だからな」

さっきの今でこの子の身を案じて言っておく。

「なんで？ お金くれるいい人じゃないの？」

「違うんだ。あぶないんだ。そういう人についてったら殺されちゃうかもしれないからな」

「えええっ！？」

「分かったな。分かったら、この道は通るな。人がいっぱいいるとこを通れ」

「でも、この道友達の家に近いんだよ？」

「急がば回れた。危険がある道を通るのは駄目だ。もしも通るならその1000円は返してもらうぞ」

「……分かったよ」

男の子はしぶしぶ頷く。

これで、未来に起きる事件が一つ防げたと考えれば1000円はなんて安いものなのだろう。

俺は携帯を開き、先程とった車を少年に見せる。

「この車見なかった？」

黒塗りの怪しい車だ。誰でも見たら「んん？」と唸るようなものだ。

「んん？ 見たぞ」

「どこでだ？」

「向こうの交差点で止まってた。どこに行ったかは分かんないけど」

「ありがとな」

そうこうしてる間に人が少ない道から出た。

少年とはそこで別れ、少年が教えてくれた交差点に向かう。

人は中々いて、店も結構ある。

待ち合わせに適した場所もあり、事実誰かを待ってるのかあちこちに人がいる。

もしもここにずっといる人がいるなら絶対に見たはずだ。

俺は近くにいた二人組みの同年くらいの女子に話しかける。

「あんたらに聞きたい事があるんだけど……」

話しかけると、一人は人見知りなのか俺の顔を見た瞬間に体を震わせる。

俺の顔が怖かったという理由ではないと願いたい。

その子を庇うように強気そうな女子が俺を睨みながら言う。

「ナンパなら他に行きなさい。私たちは友達を待ってるんです」

「誰が、ナンパなんかするか。この写真に写ってる車知らないか？」

俺は携帯を二人に見えるように向ける。

強気な女はまだナンパと勘違いしているのか警戒したままだ。すると、後ろで怯えていた女が手をあげる。

「その、車。見ました」

周りの雑踏に掻き消されそうな、消え入りそうな声を俺の耳ははつきりと拾った。

「どこに行った!？」

つい、言葉に力が入ってしまう。

女はひいっと悲鳴をあげて、それを見ていた強気女が目を吊り上げる。

「あんた、この子は気弱なんだから丁寧に扱いなさいよ」

「物かよ……」

なんだろう。割れ物注意とか貼られているのだろうか？

「黙りなさいよっ!」

俺の呟きを聞き、蹴りをかましてくる。

なんて凶暴なんだ。ライオンだ、こいつ。

又はクマでもいい。

「大丈夫だよ。その車は向こうに行きました」

女が指を差した方角は昔の家がたくさんあるほうだ。

古い木の家がたくさんあり、俺は落ち着いていて結構好きな場所でもある。

が、中には廃墟になり、そのまま放置されているような危険な区域もある。

廃病院なんかもありこの街の心霊スポットとしても知られている。はつきり言うと、ロクデナシのたまり場にするには最高の場所でもある。

「ありがとな」

一応微笑み、礼を言うと、女はぼつと顔を染める。

熱でも、でてるのか？

今日は日照りが強いのもあるから体が弱そうないつなら仕方ないかもしれない。

「用が済んだならさっさと行きなさいよ」と強気女が言ったので、気弱女が途中で倒れないことを切に願う。

離れようとした瞬間、

「よう、姉ちゃん。俺たちと遊ばない？」

茶髪なチャラ男四人組みが二人に話しかけていた。

本物のナンパだな。

「俺たち四人で何でも奢るよ？ 不快にはさせないからさ」

もう既にその態度が不快そうだぞ。

強気女は嫌そうに顔をゆがめる。

話しかけた男はこのチームのリーダーなのか、髪がツンツンしまくりの針のような髪をした男が強気女に絡む。

さりげなく肩を組もうとしたのを強気女が払う。

「私達、友達と約束してるんです」

「男？ 女？」

「おん……男です」

女って言おうとしたのを慌てて男と言い換えたようだ。
確かにナンパした男たちは女同士で遊んでいると思ってるのだ
ろっ。

言い返し、だがナンパしてる奴は大抵お頭おつむが悪い。

「その男よりも、絶対に楽しいからさあ」

今度は違う奴がでしゃばってきている。

強気女は喧嘩っぱやいのか拳を震わせている。

俺も忙しいのに 仕方ない止めてやるか。

「あのー。その二人を俺の待ち合わせてた人なんですけど……」

二人を守るように間に割り込み、俺が穏やかな顔で言った。

妹曰く俺が穏やかな顔をしているときが何が起こるか分かったもん
じゃないと一番怖いらしい。

「あ”ん？」

女に接する笑顔ではなく、威嚇する形相だ。

相手の身長はかなりでかい。俺が175くらいだったが、それよ
りも頭一つ分大きいので180は超えているかもしれない。

よく見ると、このチャラ男軍団は身長で見分けがつく。

今俺と対面してるこいつが一番大きく、他の三人は全員身長が近いというわけではなく、目の前のこいつを特大とするなら特大、大、中、小と分けられる。

特大が俺にキスでもするつもりなのか半端なく顔を近づけてくる。

「てめえ、痛い目みたくなかったら女置いてさっさと帰れや」

確かに。気弱女には礼があるが強気女に蹴られた分でチャラなはずだ。

それでも、困っている人は俺の関わりのある人間なら助けてしま
うのが俺なのだ。

ああ、偉いな俺。

「てめえ一人でこの子たちが満足すると思ってんのか？ 見た目は俺ほどこっこよくねえしさ」

俺ほど、ということは多少かっこいいのか俺は？

こんなナルシストに褒められても全く嬉しくないし、むしろ吐き
気が。

「四人だどう考えても多いだろ。采配ミスだろ。せめて同じ数に
しろよ」

「てめえ、うつせえんだよっ！」

今思ったがこいつは「てめえ」で切り出すのがマイブームかなん
かなのか？

うざいんでやめてもらいたい。

俺の胸倉を掴み、睨んでくる。

後ろに控えてる三人も仲良く睨んでくる。

「マジ殺されてえのか!？」

こいつは、脅す相手を間違えている。

今、俺は大きな事件に立ち向かおうとしている最中だ。

相手はどんな武器を持っているかは知らないが少なくともこいつらよりは強いはずだ。

……そうだ、こいつらに時間を取られている場合じゃない。

「うつせんだよ。ツンツン野郎。ツンツンさせるならバスターソードぐらい持ちやがれ」

「ああ？ 意味わかんねえこと言ってるじゃねえぞ！」

俺の肩をどついたので、わざと思いつきり倒れる。

「へ？」

俺は肩を押さえて、うずくまる。

「いてー。まじいてー。折れた、絶対折れた」

「てめえ、棒読みでふざけたこと言ってるじゃねえ！」

俺は立ち上がり、埃を払いコホンと咳払い。

「見逃してやってもいいぜ？」

「ふざけんなよっ！」

喧嘩つばやいのはこいつもらしい。

手をあげ、俺を殴ろうとしたので俺は避ける。

勘違いしないでもらいたいが俺はハンドレッドパワーがなくても喧嘩には慣れている。

いや、ハンドレッドパワーのおかげで戦いになれたといったほうがいい。

伸びた腕の手首を握り、捻る。

「いだっ！」と叫んだ男の肩を掴んで膝を腹に入れる。

極大男は腹を押さえてうずくまる。

「さて、残りの三人は？ どいつから倒されたいのか言ってくれ」

俺がにつこり微笑むと残りの三人は極大男を抱えて「失礼しましたー！」と叫んで逃げていった。

てつきり極大男は置いてけぼりで逃げるのかと思ったがちゃんと連れて行くんだな。

俺は腕時計を見る。

事件が起きてから既に30分ほどが経っている。
今頃身代金を要求されているかもしれない。

「お前等、見た目だけは可愛いんだから気をつけろよ」

まったく余計なことに時間を取られた。

俺は二人の返事を聞かずに気弱女が教えてくれた方向に走って行く。

途中人を捕まえてさらに敵の居所を探っていくと。
結構すぐに見つかった。

車が二台、止まっている。

一つは俺が見たものと同じ、番号も同じで、もう一つは番号は違

うが車は同じ物だ。

「さて、中に入るか」

建物は……汚い。

元々は倉庫かなにかなのか、中は広い。

ゴミなどもそこら辺に散らかしたまま、やりたい放題だ。

というか、あっさり入れたのだが……警戒していないのか？
中を進んでいく。

極力、足音は出さないように進んでいくと。
いた。

縄で縛って動けなくされた少女が犯人を睨みつけていた。
その少女を囲ってた犯人が一、二……五人か。

全員少女を見て、げらげらと下卑た笑いを浮かべている。

気持ち悪いな、あいつらロリコンだな。

とりあえず、こちらを見ている人間は一人もいない。
だったら、仕掛けるか。

俺は腕時計でアラームを四分五十五秒後にセットする。
五分後にしないのは切れるまで戦うと危険だからだ。

よし、始めだっ！

能力発動と共に時計を押し、走り出す。

少女に一番近い、俺を殴りやがった一名を蹴り飛ばし少女を救出。
お姫様抱っこでだ。

かつこ悪い俺がやると似合わないがな。

「なっ！」

蹴られた男を見てか、それとも突然俺がいたことに驚いたのか声
が上がる。

用は済んだ、後は警察でも呼んで終いだ。

と、思っていたが　こいつら中々反応が速かった。
全員が即座に臨戦態勢を取って拳銃を抜いていた。
簡単に拳銃つてのは手に入るのな。
のん気に対応しているが、しかし現状はあまりよろしくない。
四方から向けられる、四つの拳銃。

「動くなよ、兄ちゃん」

気持ち悪い笑みを巧みに使いこなす男。
気持ち悪く顔を合わせたくない俺はそつと顔を天井に向ける。
どこか足場がないかと探すためにだ。
一応はあるな。
端の方にだが、作業用で組まれた不安定そうな物だが。

「お、お兄ちゃん。やばいです」

俺の腕のなかでがたと震えている少女に、

「ちょっと、ジャンプするからしっかりつかまれ」

俺が教えると、コクリ。

震えながらも首を何度も上下させる。

確認ができたので、男どもが「人質を返せ」とか言って来るのを
左から右に流して、思いつきり飛ぶ。

誘拐犯は驚き、発砲を忘れてくれたのは幸いだ。
高さ三十メートルほどあるそこに降り立ち、少女を下ろす。

「あいつらしめてから戻るから……後、警察に連絡しといてくれ。
携帯は持つてるよな？」

最近の小学生は携帯の一つや二つ持っている。

ましてや誘拐されるほどの金を持っている少女だ、持っているかは聞くまでもない。

うんと答えるので、こちら付近の住所、黒い車が停まっているのが目印だと教えてから下に戻る。

残りは、二分三十秒程度。

こいつらを倒すなら一分もいらぬな。

「てめえ、痛い目見たくなかったらさっさと返せやつ！」

俺の恐怖をあおるために、拳銃を何度も印象付けるように振る。チラと興味なさそうに視線を送り、

「おまえからな」

俺は、そう言って一人目の懐に移動して殴る。

すぐさま、二人目、三人目、四人目と流れるように攻撃して。

十秒も経たずに壊滅させた。

これで、一件落着だな。

少女を降ろしてから、警察に連絡したのを確認して犯人を縛り上げる。

その後、やってきた警察に顔はばれたくなかったが仕方なく事情を説明。能力を伏せて説明したせいで、厳重注意をされた。

何でも危険だかららしい。

仕事で忙しかった両親が駆けつけてきて無事だ。

「お兄ちゃん、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる少女。すっかり暗くなった外で両親が待っている中礼を言いに来てくれた。

もう、何度も言われているが感謝されるのは悪くない。

「今度からはもう少し安全な遊びにしてくれ……」

こっぴどく叱られた俺だが父親の名前を出した瞬間にすぐさま解放された。

親父怖い。

「あつ！ お兄ちゃんと遊んであげるの忘れていました！」

「待て、なぜ上から目線なんだ？」

「今日はもう無理なので、携帯のアドレス交換してください」

「嫌だ、もう関わり合いたくない」

「もう、ツンデレですねー」

少女があまりにもしつこいので携帯を投げ渡す。
赤外線で交換しているようだ。

「はい、終わりました」

少女に手渡される。

満面の笑みを浮かべている。今日の事件はまるでなかったように。
俺は携帯を操作して登録されている名前を確認して書き直す。
面倒な少女と改名して、ふと、気づいた。

俺の携帯にはその人の情報を細かく書いたりできるんだ。

で、その情報には近くのお嬢様が行く中学校名が書かれていた。
お嬢様校なのは分かる。でもチュウガク？

俺は、喜びを表現するくるくるダンスを踊っている少女に、携帯
を振るわせながら、

「お、お前……中学生？」

「……バカにしました？」

「何歳だ？」

「一四です」

不機嫌そうな顔で、言った少女に。

「……もっと身長伸ばせ」

俺は世界の恐ろしさに絶望しながら言った。

「……ってことがあったんだよ」

興味津々に絵本の読み聞かせを聞くような態度の妹に説明してや
ると、。

妹は、

「……妄想？」

とって馬鹿にしました。

六話 武偵高の入学試験に行ける気がしない

「それでは、今からお前に死んでもらいます」

なんで、なんで俺は、こんなに不幸体質なんだ。

俺に向けられる拳銃。

今日は武偵高校入学試験日。

俺も試験を受けるために学校に向かっているときに、事件は起きた。

犯罪者が暴れまわっているのだ、同じバスの中で。

武偵高へは専用のバスが出ており、それに乗ってレッツラゴーと向かっている最中なのに。

その犯罪者は俺を見て、真っ先に気に食わないと拳銃を向けてきたんだ。

前にもこんなことなかったか？

俺はそれをつまらないといった視線で見つめていると、

「やめろっ！」

誰か知らないが男の腕を掴んで、そのまま捻る。

ぐあつと犯人は悲鳴をあげて、適当に乱射する。

正直能力を使わずに助かったと感謝している。

このバスには俺と同じで武偵になろうとしている人間が多数乗っている。

中には中学のときから学んでいるやつもいるので、放っておけば事件は解決するのだ。

犯人の目的は知らんが、おおかた武偵に恨みを持ってでも武偵には敵わないから武偵見習いを殺してやろう！ とか言うやからなのだろう。

迷惑な話だ。

武偵が他人に恨まれてもしかたのないものだから仕方ないといえ
ば仕方ないのかもしれないがな。

犯人は勇敢な男に締め上げられて、そこでゲームオーバー。

縛られて、終了だ。

ご苦労なこった。

全員が拍手をして、犯人を捕まえた男もまんざらではないように
照れている。

周りに自分のほうが優れているというアピールができたじゃない
か、よかったな。

それにしても俺は犯罪者に気に食わないと思われる顔なのだろう
か？

明らかに多くないか。

今度からはもう少しどうにか狙われないようにしないといけない
と改めて、とりあえず休む。

と、犯人がぐくぐと笑い声を上げ始めるものだから俺もゆっくり
と眠っていることが出来ない。

「うるさいぞっ」

勇敢な男が咎めると今度は高笑いを浮かべる。

「超能力者をご存知ですか、見習い諸君」

俺は首を傾げていたが、隣に座っていた 隣に座ってたんだ
勇敢な男はハッとして、即座に胸に手を突っ込む。

「武偵を超えた存在ですよっ」

男は縄を何かで斬った。

俺が目を見張っていると、何かが飛んできた。
俺はそれを紙一重で避けると後ろの窓ガラスがはじけ飛ぶ。
勇敢な男は肩にかすったように肩を押さえてうずくまっていた。
俺は割れた窓ガラスに視線をやると……水か？
窓がぬれていた。

「これが超能力です」

ふわっと腕を振ると、水のレーザーがこちら向かってくる。
俺はそれをハンドレッドパワーを使ってガードする。

「死ね死ね死ね！」

男は、近くにいた女に向かって手を向ける。
女は驚き動くのが遅れたのか、避けられそうにない。
くそ、なんで俺がこんなことせにゃあかんのだ。
思いつきり跳び、女と男の間に入って庇う。

「おい、大丈夫か。女」

「は、はい」

俺は即座に振り返り男の腹に拳を入れる。
ぶによつと手ごたえがないが、このままバスの外まで行ってやる。
走り出して、入り口のドアにぶつかりそのまま一緒に外に出る。
分断に成功だ。

「中々の力をお持ちですね。くく面白い」

「こっちは面白くねーんだよ。さっさと決める」

俺の手は水でぬれていた。

俺のパンチを予め水を張ることによってガードしてたのか。

厄介だな。

俺は防御されないように高速で動いて男の後ろに回り、蹴りを入れる。

が、男は俺のスピードがあることに気づいていたのか全方位を水のバリアで守ることにより簡単に防御されてしまう。

そして、蹴ったばしょの水が膨らんだと思ったらレーザーのように俺を吹き飛ばす。

痛くはないが、まじで厄介だ。

「くくくくく。武偵見習いでここまで強いとは、将来が楽しみです
ね」

「絶賛将来を邪魔されそうだがな」

俺は制服の裏側に手を入れて一丁の拳銃を抜き出す。

俺はデザートイーグルとレーザーシクシューターという拳銃を持っている。

前者は実在するもので後者は実在しない。

そして今はレーザーシクシューター レサを抜き出した。

親父が「魔法みてーなのにつけると一瞬だけ掻き消すんだぜ」と自負していたもので、なにやら拳銃自体に特殊な加工をしているそうだ。

魔法みたいなのは超能力のことだろう。

まじでちゃんと説明しろよな。

俺はフルオートモードで全弾発射。

「効きませんよ」

男は水のバリアを張ったので、計画通りだ。
俺の銃弾15発が水のバリアに当たる。

当たった箇所すべてがガラスのように割れる。

それはほんの一瞬だが、俺には十分だった。

飛び込み、ぶん殴る。

バリアは半分ほど修復されていたがそれもと殴り飛ばした。
能力も、切れた。

「どうだ、こんちくしょー」

さすがに疲れた　精神面でな。

俺はせめて道に邪魔にならない　すでにかんりの邪魔になって
いるが　ように近くの路地裏に向かう。

あいつの身柄は警察のほうでどうかしてくれるだろう。

それよりも……今は逃げないと。

初めから、俺と男の戦いを監視しているやつがいた。

敵は……一人じゃなかったんだな。

俺は腕につけているワイヤーを発射できる機械　腕輪とよく勘
違いされる　を使い上に飛ぶ。

これも武偵になるならワイヤーアクションの一つや二つできなき
やなということで親父にもらったものだ。

全く、こんなものを作る親父の友達というものを見てみたい。

親父の話だと、気に入った仕事しか受けず世界的な大発見　超
能力の能力を一瞬だけどなくすのは世界的な大発見でそれが公表さ
れれば超能力者が涙目らしい　も特に公表せずに親父にのみ試さ
せる変わり者らしい。

そして……俺のことを偉く気に入っているらしい。

あーいやだいやだ。

と、目の前に誰かが降り立った。

「まさかばれるとはね。ふふふ」

くくくの次はふふふか。

しかも今度は女。

ふふふ女は右手をこちらに向ける。

俺は嫌な予感がしたので横に飛ぶと、俺がいた場所には何かが通過した。

今度は……風か。

厄介すぎるな。能力もなしに二回戦目に突入か。

俺はデザートイーグルを抜き、一発放つ。

カタガヒンマガル！

威力は親父が初めて見せたときと変わらず、やばい。

車なら一瞬で大破しそうな威力の拳銃弾は不可視の壁に阻まれる。それでも一瞬埋まったのを見ると、デザートイーグルの威力は伊達ではないようだ。

「なんていう馬鹿みたいな威力を持った拳銃だ。ふふふ」

俺は何かいつてらっしゆる婦人の言葉を無視して隣の屋上にワイヤーを打って地面に着地。

ワイヤーはバンジージャンプの補助のような使い方をさせてもらった、

着地の際に多少足が痛んだのは気にして入られない。
能力が回復するまでにげねーと。

「逃がさないわよ。ふふふ」

しつけーんだよ。

俺は逃げながら、デザートイーグルを放ちそのたびに痛みを耐え

るという行為を続けて、稼いだ十分。

「やってやるぜっ！」

俺は出し惜しみなく能力を発動させる。

急に立ち向かってきた俺を見て、わずかにいぶかしむ。

「なるほどね。時間に関係する力のような。ふふふ」

「ああ、そうさ。だけどこうなれば俺は無敵だ」

レサを取り出して三点バーストで発射する。

女はそれを見てまた風で防御して……一発が肩口にあたりよろける。

防弾服で助かったな。

俺は空いた穴を見て拳を叩き込んで二人目を撃退する。

まだ、いるな。

あと一人いるが、俺の能力を知ってか襲い掛かってこない。

俺はとにかく狙われないために遠くまで走って逃げた。

武偵高に逃げ込むという方法も考えたが、迷惑になりそうなのでやめた。

武偵高の入学試験が受かるか受からないかの以前に受けられるか、受けられないか分からなくなったな。

七話 入学はパスだ

俺ははるか遠くまで逃げた。

まだ人工浮島にはいるが、それでも撒けたはずだ。

「俺から逃げられると思っているのか」

大剣を持った男が俺の目の前に現れた。

俺はちつと舌打ちして、デザートイーグルを構える。

二丁拳銃で行きたいが両手に銃持ってたらリロードができないのでパス。

それに仕留めるならこれで十分だ。

「いくぞ！」

男は威圧的な声をあげて、俺に大剣の切っ先を向けた突進を仕掛けてくる。

「ぐっ」

俺はなんとか避けて、空いている左手で拳を作り男の即頭部を殴ろうとするが避けられ、剣の腹で殴り飛ばされる。

壁に背中をぶつけたよ。

ワイヤーを使って近くの建物の屋上に逃げる。

ってジャンプして追いかけてきやがった。

俺はデザートイーグルを二発撃ち、打ちひしがる。

男は大剣でガードするが、俺の銃弾の威力にまけ吹き飛ばされる。全く、常識はずれな威力だ。

残り五分ほど稼げば俺の勝ちだ。

と、俺の弱点を知ったな。

一対一を何度もやられると手のうちようがないと言ったことだ。

もう少し生身の状態でも戦えるようにしないとな。

男はすぐさま、俺に突撃を繰り返す。

俺はすべて紙一重で避けて時折攻撃をして避けられるを繰り返している。

「おらっ！」

バンッ！

デザートイーグルから放たれた銃弾は男の大剣を吹き飛ばす。

やったと思ったら、男は細身の長剣をどこから取り出して繰り返し攻撃を仕掛けてくる。

それより、なんでこいつは拳銃を使わないんだ。

いや、使われたら勝てる気がしないが今は感謝しよう。

何度もぎりぎり避けていたが時々、致命傷ではない程度にダメージを受ける。

そして、時間だ。

能力、発動だ。

「喰らいやがれっ！」

俺は渾身のスピードで男に拳を叩き込む。

男はそれでも反応して長剣を間に挟んだが、俺はあっさり壊して男の顔面に拳を入れた。

当てる瞬間に腕を引いて加減はしたので大丈夫なはずだ。

「さて、なんで俺を狙ったのか教えてもらおうか」

顔面から血を出しているにもかかわらず男は余裕綽々と答える。

「アンタはある人の依頼で武偵高に入れると言われてる」

「はああ？」

「アンタが入ることによりすべての歯車はずれて、そしてあの子の未来も変わる。あの人はそう言っていた」

「意味わかんねーけど」

「とにかくだ、お前が武偵高に入っているのは二年からだ。分かったら大人しく一般高に行け」

「てめーに命令される理由はねーけど……」

腕時計を見る。

今から武偵高まで向かったら合計一時間近くの遅刻だ。

武偵は時間に対してルーズであるのはよくないということ遅刻したら即座に不合格と親父が言っていた。

つまり、正当な理由があったとしても俺はもう無理なわけだ。まあ、いいか。

こんな犯罪者と戦うような日々には突っ込んで疲れるだけだ。能力のほうもたとえエリアにばらされたとしてももうどうでもいいや。

武偵高のバスの中のやつらにはばれているんだからな。

「わーったよ。俺はこのまま帰る……面倒くせーしな」

俺は男を無視して、まだ残り五秒程度のハンドレッドパワーで近

くの駅まで走っていった。

八話 能力のための兵器（前書き）

次回からようやく原作に入ります。

ヒロインは未定ですがアリア以外の誰かにしようと思っています。

八話 能力のための兵器

「受けてないっ！？」

家に帰ると、妹からうるさいお説教を受けた。
うるさいな、こっちだっていろいろ理由があんだよ。

「今日はすき焼きだったんだよっ！？ 私も転校するし、兄さんも合格するからって」

「まだ、俺は試験を受けに言っただけだ……って、へ？」

「何、アホみたいな声だしてんのよ」

さっきから俺よりも偉そうに振舞っているのも気になるが、それは置いて。

「転校ってどこにだよ」

「武偵高付属中学に決まってるよ」

「……おめ」

俺は水面下でそんなことがあったとは露知らず、口から魂が飛び出る気分だった。

「おめじゃない！ 兄さんはどうするのっ！」

「俺は適当に再募集してるところを探して行くよ」

「武偵高には入らないのっ！？ 編入とかもあるでしょっ！」

「ああ……じゃあ、二年からね」

「なんでそんな無気力なのよ」

「これが俺だしな」

「……っ！ もう知らないから」

妹はそう言っでどこかに消えてしまった。
心配させたのだろうか。

俺は父と母に報告をして、疲れた体を癒すために布団に入った。
何も言っでこないというのは一番体に堪えるんだな。
父も母もなにも言わずに温かい目で見やがった。

俺は一般の高校に入学した。

何もない、事件も何もな。

ただ、二年生からは武偵高に移るつもりだ。
すでに編入試験を受ける予定はできている。

もっと早くても良かったが、キリがいいじゃないか。

妹は武偵中学で優秀な成績をおさめてインターンとして武偵高に入ったらしい。

同時期に入っただ友達で確か……間宮あかりとかい女の子も一緒

に入っているらしい。

時々家につれてきやがるのはやめてもらいたい。

妹の友達と会う兄の気持ち いもつと 複雑すぎる。

間宮はいい子だからいいがな。

あと、妹とは俺が武偵高に落ちて以来ほとんど口を聞いていない。寂しいものだ。

学校の授業はつまらなくはないが、楽しくもない。

俺は、いつのまにか武偵高に行きたいと心から願っていたんだな。あと、近況報告のついでにすごいものを手に入れたので書いておこう。

親父の友達に能力について話して、いろいろ指導してもらった。能力のないときは、パワードスーツを着れば問題はないといわれた。

このパワードスーツ親父の友達が何かのアニメをモデルにして作ったらしいが、オリジナルに改造されすぎていて俺には何が元だったのか分からない。

他の人も分からないだろうといていたので特に気にはならない。このパワードスーツとにかくすごい。

着ていれば平時時の身体能力も2倍近くまであげてくれる。能力発動時は特に効果はないが平時時に上がるのは嬉しい。

さらに腕の部分にはワイヤーを放出させる道具もついている。

モード変更をするとその部分から水が出たり炎が出たりと何でもできる。

マヨネーズも出るらしい、出したくはないが。

防弾、防刃はもちろんのこと、防火、防水、防電、なんでもおちやのこさいらしい。

……あの人は何者なのだろうか。

表舞台に経った瞬間、日本に科学革命が起こるな。

あと、俺の能力が終了する時間なども教えてくれたりするしな。スーツを着るときは携帯に似た機械に俺が指でタッチすれば着れ

る。

なんでもスーツを情報化して携帯に似た機械に入れて、俺がタッチすることにより物質化されると言う半端なく高度な科学技術が行使されていて、俺には理解不能だ。

この機械と親父の友達が持っている機械が繋がっていて、転送とかでもできるらしい。

いつでもどこでも着れるらしいが、俺には着れない理由があるのだ。

それは、一回使ったびにメンテナンスがいて、かなりの金がかかる。

気にせずに使っていると親父の友達には言われているが、気にするわっ！！

一回で百万近い金が飛ぶんだぞっ！　おいそれと使えるか！

結果拳銃からは卒業できなさそうです。

つと日記に愚痴と自慢を書きすぎたな。

後で、消しておくか。

明日は編入試験だしな。

九話 入学

「松島京です。今年から入学しました。色々わかんねーところかはああるけどよろしくお願いします」

あたりさわりのない挨拶だ。

俺は武偵高でもなるべく日陰で過ごしていきたいと思っていたから変にアレンジして目立ちたくない。

武偵高に入ったのも意地みたいなのところが大きい。

「はいはい！ しつつもんでえーす！ きょーくんの好みのタイプは？」

誰だ、あの女。

金色のツインテールの髪。

やけに身長は小さいが胸が異常にでかい。

ロリ？

俺は質問の意味は分かったが、答えられるような質問ではなかった。

好きな女なんていねーし考えたこともない。

一般の高校生からはずれている自覚がある。

「特にない。少なくともうるさいのは嫌いだな」

神埼とか、この女のような積極的なのは苦手だな。

結構流されやすいからな、俺。

周りに合わせるのを心がけているからそんな性格になっていた。

「ぶうーぶうー冷たい転入生だなあ」

自覚してるがはつきり言っな。

俺の言い方が悪かったようで、クラスは完全に静まり返っている。
俺が席に座ろうとした時に教室のドアが開く。
遅刻か。

特に気にせずに俺は席に座ろうとしていたが、

「京？」

「……最悪だ」

きょんとした目で現れた女　神崎。
神崎と同じクラスとは……人生真っ暗だな。

「アンタ、武偵高にいたんだ」

「正確には、今年から編入したんだよ」

「どい？」

「探偵科だ」

「……なんでよ」

「面白そうだからだ」

「アンタはあたしと組むためにいるのよっ！」

「勝手に俺の存在意義を決めんな……ってなんだこの視線？」

クラス中から好奇の視線が突き刺さる。

ここから見回すと一人だけこっちを見ようとはしない男がいることに気づいた。

俺はあいつと気が合いそうだな。

一人でいる時間が多そうな男だった。

見た目で判断するのはいけないとは思うよ。

「ねーねーきょーくんってどんな関係なの？」

さっきの女がずいずいと身を寄せてくる。

女の匂いが、異様なまですて俺は顔を背ける。

女の匂いは何か苦手だな。

逃げよう。

俺は教室から飛び出そうと、入り口目掛けて走るが、

「アンタ、もう逃がさないわよっ！」

神埼が目の前に来て、俺の腕をつかんで背負い投げの要領で投げやがった。

思いつきり背中を打つ俺は受身なんかとれない。

「ぐほっ。ふざけんなよ、お前」

いきなり投げるなんてどんな精神状態の女だ。

「あんたはあたしのドレイなの。分かった？」

指を立てて、俺に注意してくる。

俺は慌てて、クラスを見回す。

みんながさらに興味津々の表情で……やばい、完全に誤解されて

いる。

「きょーくんって……M？」

「ふざけるな。それときょーくんて言うのはやめろ。名字で呼べ」

「今さらだよー」

けらけらとが似合う笑い方からかい続ける女。

神崎は神崎でハテナと首を傾げているし……もう、嫌だこの学校。

一日目で不登校になるぞ、おい。

俺はすべての現実から逃げるように目を閉じた。

なんか、その後に発砲音とか聞こえたけど知らん。

ギヤーギヤー騒がれていた気もするが勝手にやってる。

十話 遠山キンジ

授業のレベルは……低っ！

前行っていた高校は進学校であつたので偏差値もそこそだった。
こつちが低すぎるのか？

俺の高校が高かつたのか？

「おい」

俺の席の近くから声がする。

俺は顔をあげると、最初にみた一人でいる男だ。
目つきが悪く、何て表現したらいいのだろうか……。

「ネクラだ」

「……ぶしつけな言い方だな」

男はあと額に手をやり「朝も面倒でこれからさらに面倒になり
そうだ」と言う。

「何か用か？」

「お前今日寮に引っ越すのか？」

「ああ」

「ならたぶんお前が俺のルームメイトになるんだろうな」

「そうなのか？ 確か四人部屋を一人で使ってる奴が同じ部屋の相

手で、ネクラで社交性がなくて名前が遠山キンジとかいう奴だったな」

「俺だ、全部あてはまってる」

「やーい、ネクラ」

「うるせえ。それよりもう少し話したいことがあるんだが、ここじやなんだ。屋上に行かないか？」

「面倒だが、仕方ない。ついて行ってやる」

俺はよいしょと重い腰をあげて、遠山についていく。

朝の神埼の鬱憤をはらすために、綺麗な校舎を汚すように歩く。

「校舎を簡単に案内しながら連れて行ってくれと嬉しいんだが」

「……分かった」

それから、簡単に説明を受けていると屋上につく。

「で、話ってなんだ？」

「それはな」

言いづらそうに、深刻そうに頬を掻く。

「……愛の告白か、生憎そっちの趣味はねえ」

俺は全力で後ろに後退する。

バック走なら誰にも負ける自信はないね。

「俺もだ！ 違う。聞きたいことは神崎・H・アリアのことだ」

「神崎？」

気でもあるのか？

見た目はネクラなようだが……案外意外な面があるんだな。

俺は面白そうなネタを見つけてもう少し耳を傾けてやることにする。

「ああ。お前仲が良さそうだったから……少しでも情報をくれると嬉しいんだが」

「大したことは知らないぞ。俺は不幸にもあいつに目をつけられてるだけの男だからな」

「お、お前もか？」

「つまり、おまえもか？」

俺は恋愛のほうの話じゃなくて残念ではあったが、今度は違う意味で興味が湧いてくる。

神崎に苦しめられるもの同士、仲良くやれるかもな。

「ああ、朝にちょっと事件があつてなそれでだ」

遠山は詳しいことを話すつもりはないようだ。
俺としても興味はなかった。

「俺も事件があつたときに巻き込まれてそれでだ」

「同じ境遇だ」

遠山がポツリと漏らす。

「つまり、俺たちは大した情報は得られないということだな」

二人とも神崎のことを詳しく知らないのだ。だから、これ以上ここで話していても無駄だな。

「だが、同じ境遇の人間がいるということは相談はできるな」

俺が、納得したように呟くと遠山は「そうだな」と頷く。

「そろそろ昼でも食いに行くか」

俺の提案に遠山は時計を確認する。

「確かに早めに行くにこしたことはないな」

遠山は屋上の出口に引き返そうとして、ぱっと俺をつれて物陰に隠れる。

なんだなんだ。

「やっぱりそっちの趣味が……」

「ねえーよ！ クラスの女子だ」

「……そっぴゃお前クラスから質問責めにあつてたからな」

女子たちは色々好き勝手に話している。

俺と遠山はそれを置物のようにきく。

初めは遠山の話だったが、神崎の話に変わる。

陰口みたいな物言いは俺にとつて不快でしかなかった。

陰口は嫌いだ、昔俺は能力の制御が出来ないときにいじめにあつたからな。

バケモノだと。

だから、俺は遠山の制止もきかずに飛び出す。

まさか、人がいるとは思ってもいなかったのか女子たちは口をあぐりと開ける。

カナブンでも持ってたらず放り込んでいるかもな。

「おい、陰口を言うのはあんまり放っておけないぞ」

「あ、あんたは編入生の……」

「友達がいなのは言わなくてもわかる。だがな……あれ？」

俺は勢いで飛び出したところがある。

というか勢い以外では飛び出していない。

神崎を庇う理由は俺と似たような状況におかれていたからだ。

庇う言葉が見つからない。

あいつ……いいところあったか？

いきなり投げ飛ばしてくる。殴る、蹴る。

暴力のバーゲンセールな女だ。

「いや、陰口はよくないな。でも庇う言葉も見つからないから、とりあえずじゃーな」

言うことはない。

俺は屋上から避難したのだった。

十一話 寮生活

寮への引越しをやっと終えた。

本当は春休みのうちにやっておけばよかったのだろうが……すっかり忘れていた。

ま、まあ、誰にも忘れるということはあるのだし、いいよな。新しい四人部屋である広いこの場所はいいな。

「……お前工口本とかそういったものは持ってないよな」

「なんだ、お前は俺の恋人か何か？ 生憎そういったものはわざわざ好きこのんでみるつもりはない」

「なら、いい」

「……？ お前がホツとする理由が分からないのだが……」

「こつちの話だ気にしなくていい」

「気になりまくりなんだが」

聞くなといわれているので下手に詮索するのはやめよう。

俺は中々なソファに腰を下ろして、横になる。

「お茶持ってきてくれ」

「はいはい。って何で俺がそんなことしないといけないんだよ」

「一応客だぞ」

「この部屋の住民だろうが」

「……腹減ったなあ」

「何も出さないぞ」

「ちっ……!!」

「なんだこの、横暴ぶりは……」

俺はとりあえず、無視しよう。

キンジ（遠山と呼んだらキンジのほうが分かりやすいと言われたので仕方なく名前にしてやった）も対面に座り、なにやら考え事をしている。

それにしても今まで一人でこの部屋にいたのか。

なんてうらやましいんだ。

俺はポケットに入っているいつ買ったか知らないくしゃくしゃなガムを口に放り食べていると。

ピンポーン。

ドアチャイムが鳴る。

キンジは聞こえていないようで、まだ、思考に耽っていた。

学校初日で俺に用があるとは思えないのでわざわざ出たりはしない。

相手を驚かせてしまう可能性もあるからな。

ピンポンピンポーン。

おい、早くでてやれよ。

だが、まだキンジが動く様子はない。

……聞こえてるよな？

又はよほど耳が遠いのか、どちらかだな。

ピポピポピポピポピポピン！

ドアチャイムで何かを演奏しようとしているのか？

迷惑極まりない騒音でようやくキンジは「うっせえ！」と怒鳴り、玄関に向かっていく。

「耳が遠いつて大変なんだな」

「聞こえてるっ！」

キンジは怒鳴りのこしていく。

いやあ、あいつはからかうのが面白いな。

これからもどんどんからかおう。

どうせキンジの友達だろうから、俺はなるべく邪魔にならないように部屋を移動したほうがいいかもしれない。

俺が配慮して体を起こすと「待て、勝手に入るな！」と怒声がする。

勝手に？

親しくない奴にでもあがりこまれたのか？

俺はこっそりと見ると 神崎っ！？

さっとソファから転げ落ち、ソファの陰に入るようにして神崎の視界に入らないように隠れる。

神崎は特に俺に気づいた様子はなく、窓付近まで移動する。

俺は幸いにもテーブルがあるからいい感じに見えていない。

「 キンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい! 」

でるにでねえ……。

十二話 風呂場覗き

話をまとめると、キンジの強さに惹かれて、自分のドレイにした
いというわけだな。

ぼこぼこ殴られた頭で考えた。

……もしかしてキンジに押しつけければ俺の力を狙っていたのがな
くなるんじゃないか。

よし、なるべく神埼の前では能力を使わないようにしよう。
そうすれば武偵高で面白そうな授業を安全に受けられるな。
二人の対話を聞き流しながら、俺は自分の作戦をたてる。

「でてけっ!」

突然神埼に蹴り飛ばされたので、俺は啞然とする。

「ちょ、ちょっと待ってって、一体何がどうなって……」

「でていけっ!」

外に蹴り飛ばされ、俺とキンジは寮の前に立ち尽くす。

「どういうことだ?」

「な、何も聞いてなかったのかよ」

「当たり前だ。事情を説明してくれ」

「つまりだ。神埼があ部屋に泊まる」

「お前の事が好きで？」

「はっ？　ありえん、だろ」

「動揺、してんな」

「してねえーよ！」

冗談だから別にいいが。

俺はキンジがよくお世話になるというコンビニに案内してもらい、そこで時間を潰す。

キンジは立ち読みだけで帰るのは気が引けるとかなんとか言っ、て漫画を買った。

別にんなの気にするなよと思うが……俺の財布が軽くなるわけではないので特に口を出すようなことはしない。

寮に帰り中に入る。

神崎は、いない。

帰ったのか？

「お、おい。アリアの奴。風呂にいるぞっ」

キンジが焦ったような口調で言う。

「よし、覗け」

「死ぬぞ、俺が」

「俺はその間に逃げる。グッドラック！」

「待て、役割を変更しやがれ」

男二人で入浴中の女子の影を見ている。
変態だ。

まあ、俺は全く興味がないので特に問題はない……のか？
問題あるだろ。

「とりあえず、アリアの武器を奪って隠しておくぞ」

そっぴや呼び方がアリアなのな。

仲いいなあ。

と、そこに。

……ピン、ポーン……。

慎ましい、性格が現れるようなチャイムが響く。

キンジはやばっと口を半開きにする。

「こっちは手が離せないから出てくれ」

抑え気味の声をあげながら、神崎の……し、下着を持っている。
変態だ、変態だ。

「手、離れたほうがいいぞ」

女子の下着など家族以外のは始めてみたが、俺は案外そういうのが苦手らしい。

目を逸らしながら、忠告すると、「いいから、早く出てくれ。問題は無いから」というので俺は共同犯と思われたくないので、そこから逃げるように玄關へと行く。

「はいはい、と」

ドアを開けると、大和撫子な綺麗な女がいた。目立つ印象は巫女服を着ている（なんで巫女服？）。すごい清楚な感じの人で、漂う空気からこの人が温厚な性格なのだと分かる。

どちらかというとアリアよりはこういう落ち着いた感じの方が俺としては接するのがラクだな。

「え……？」

きつとキンジに会いに来たのだろう。

それでキンジではない人間が現れ、戸惑っているのだろう。

俺は相手を警戒させないように、できればさつさと用を済ませるために、自己紹介をする。

「俺は松島京だ。今日編入してきた。この部屋で過ごすことになっている」

用件だけは伝わっただろうか。

「あ、えっと。そのありがとうございました！」

「……？」

何に対する感謝？

「入学試験のとき、バスの中で助けてくれて、ありがとうございます！
す！」

「バス？ 助けた？」

記憶にない。

バスと聞けば戦った記憶しかなくって……俺、誰か助けたか。

まあ、詳しく詮索するのは今は避けよう。

用を聞いてキンジに伝えないとな。

「今、キンジ手が話せないんだ。直接話さなきゃいけないことじゃなければ俺が伝言しておくが？」

「あ、えっと……これ、夕飯に作ったんです。あなたの分はありませんが……すみません」

「別にいらなから謝るな」

人の彼女さんの飯にたかるほど傲岸な人間ではない。

ていうか、キンジモテモテだな。

飯を作ってくれる優しい彼女さんはいるし、神崎にもモテてるし。

「それと、今朝の周知メールの件で大丈夫だったか伝えておいてくれますか？」

「ああ、分かった」

周知メールって俺はよく知らないが武偵高からの連絡みたいなものだったはずだ。

今朝なにかあったのか？

「それじゃあ、失礼します」

「ああ、夜道気をつけろよ」

俺がドアを閉めて、中に戻る。
ずしりと思い夕飯をリビングに持っていくと、疲れた顔をしたキングがソファにいた。

「ほら、名前は知らんが女が飯届けに来たぞ。後、周知メールの件で大丈夫だったか聞いてたぞ。メールでも送っておけよ」

「あ、ああ。やっぱり白雪だったか」

「さすが、彼氏だ。白雪って名前なのか」

「彼氏じゃない。星伽白雪だ」

星伽ね。覚えた。

「彼氏だろ、神崎と同居してるのばれたらやばいぞ」

不安感を煽るように言うとキングはむっとした顔で返す。

「彼女じゃない。あいつは幼馴染でやたらと俺の世話焼きたがる世話好きなんだよ」

はぁと疲れたようにいうキングは嘘をついているようには見えな
い。

……絶対星伽の奴は気があるだろ。

普通幼馴染がそこまでするわけがないからな。

キング、鈍感なのね。

「まあ、俺としてはどっちでもいいや。どっちにしろ面白そうだな」

「……あまり変なことしないでくれよ」

「分かってるって」

あまりじゃないが面白くかき回してやる。

「あ、あんたたち、何してんのよ」

「アリア……！　なんで下着手に持ってたんだよっ！！」

キンジが姿に気づき、怒鳴ると逆にアリアが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「なんで……、あたしの下着が廊下に落ちてるのよ……どっちがどつたのよっ！」

「キンジだ。俺はやめろと言ったんだが、『幼児体型の女の子が大好きなんだー！』とか叫んで風呂場突っ込んでいった」

「な、ななな……」

言葉にならない声を出して口をあわあわと動かしまくる。

体全体が赤いんじゃないかというばかりに赤くして、頭のとっぺんからはやかんの湯気の如く煙を危険信号のように出していた。

逃げよう。

俺はそう思い、こそこそゴキブリのような動きで神崎の視線を気にしながら移動する。

「アンタも、同罪よ！」

俺に向かっつとび蹴りをしてきたので、親父との特訓を思い出して神埼を親父に見立てて、避ける。

こ、こんな場所で親父の地獄の特訓がいきるなんて。

「待てっ！」

キンジは後ろだからな！

俺は先に寮を飛び出て、玄関を力強く押す。

神埼がどこかとドアを壊さんばかりに蹴るがそれでも耐える。やがて、神崎は俺を追うのをあきらめたのか、音がしなくなる。ついで、キンジでも狙いにいったのだろう。

パパンッ キン。

ドアに発砲音がしたんだが……気のせいだよな？

ドアが防弾性だったのか銃弾はこちらに衝撃だけを伝えているがつか、なんであいつは武器を持ってるんだよ！ キンジはどうした

……まさか、死んだ？

「アンタ、いい加減出てきなさい。今なら命だけはとらないであげるから」

命だけって、キンジは？

「じゃあ、武器を捨てろッ！ 俺に戦う意志はないからな」

「拳銃がなかったらあんたをどうやって痛めつけるのよ」

ひいつ……。

能力を使って、逃げるか？

でも、怒りが治まらない限り俺が部屋に帰ってすることができない。

「神崎、何か好きな食い物あるか？」

「はあ？ ももまんよ、それがどうしたのよ」

「買ってきてやる。いくらでもな。だから、拳銃を降ろせ」

「……ば、買収されないわよ！ 十個買ってこなければ！」

「買う、何個でも買ってきてやるから」

「分かったわ、制限時間は十分よ。さっさと行きなさい」

俺は能力を発動して、近くのコンビニをハシゴしてももまんを集めて神崎の怒りを静めたのだ。

十三話 兄妹喧嘩

次の日は探偵科で授業を受けて、寮に帰ろうとしていた。

キンジから、『アリアに付きまとわれてる、助けて』とメールが届いたが無視する。

俺は神崎の情報を得るために、妹に会いに行こうと思っていたが……会いたくはなかった。

妹は俺が武偵高に落ちた（正確には受けていないのだが）ことですっかり幻滅して、以降会話をほとんどしなくなった。

そもそも妹は武偵高付属中学に転校して、さらに寮に住んだので疎遠になるのも無理はないが、あきらかに俺を下に見るようになった。

つまり……あいたくねえってわけだ。

強襲科にいるのは知っていて、神崎も同じく強襲科らしいが……そちらは今問題は無い。

キンジと一緒にデート中だしな。

俺は強襲科の前に来ている。

「さて、入るか」

一応自由履修でとっておいたので問題はないだろう。

俺がドアを開けると一斉に視線が集まる。

「お、おい編入生だ」「まじかよ……」と言った会話が聞こえる。編入生が、それも一般高からののが珍しいらしい。

中学ならまだしも高校にあがれば編入生の試験は難しい。

それも学年があがればあがるほどに。

高校から入るということは、よほど優れていないとできない。

戦い方の基礎、などは既に知っていなければ他の人に合わせることはできないからだ。

だから、編入した生徒は一目置かれることになる。
どうでもいいが。

静まり返った空気の中、目的の人物を見つけることになる。
妹も気づいたようだが、「ちっ」と舌打ちをうつ。

「随分な挨拶だな」

「何？ そっちから来るなんて珍しいじゃん」

棘のある態度に俺が肩を竦めていると、背の高いポニーテールの女の子と、見覚えのある確か名前は 間宮あかりという子が俺を見てひそひそ会話をする。

「なあ、アイツって確か編入生だよな。妹って知り合いなのか？」

「ええと、知り合いというか……」

事情を知っている間宮は「俺に話してもいいんですか？」と目線で訴えてくる。

俺は構わんと頷く。

そちらの話は置いておこう。

「神崎の情報をくれ」

「……何、その上から目線。アリアさんに興味深々なの？」

「変な誤解を持つなよ。俺はあいつから逃げるために情報がほしいんだよ」

「昨日アリアさんと仲が良かったってこと私初めて知ったよ。どこで知

り合ったの?」

「それは、なあ……別にどこだっていいだろ。お前に話す必要なんかない」

俺は、少しいらだって、相手が怒るような言葉を選択してしまう。妹は予想通り、怒り、ホルスターにしまっている拳銃を抜き、俺の心臓に向ける。

「人に聞いておいて、自分は何も話さないんだ。兄さんはいつもそうだ。大事なことは隠してる」

「……誰にだって話したくないことの一つや二つあるだろっ」

ついつい、イライラして俺は語調を強める。
妹もそれに乗っかってくる。

「だったら、アリアさんのことは話したくないことだから話さないっ!」

「なんでだよっ! わがまま言うなよ!」

「それは兄さんだってそうでしょっ!」

俺たちはどんどんエスカレートしていき、妹がとうとう発砲した。俺の腹部に直撃して、俺は体をくねらせて後ろに飛ぶ。まじで、キレたぞ。

俺は立ち上がり、能力を発動させようとしたとき。

「うるせえぞ!」

突然怒鳴られ頭をぶん殴られる。

殴ったのは、女だ。

強襲科の先生なのか……？

半端ない、威力で殴りやがって頭蓋骨が割れたらどうするんだ。

「てめえらの仲が いいのを見せびらかすなや！」

女が殴ってくれたおかげで頭は冷えた。

俺はもう、妹に用はなくなったので、強襲科から出ることにする。
くそ、結局何の情報も手に入らなかったじゃないか。

十四話 いらつき

俺はそれから毎日いらいと生活していた。
妹がなぜそこまで怒っているのか理由が分からない。

「あんた、聞いているの？」

神埼が目の前で顔を覗き込むようにしていたので驚き、顔を後ろにひく。

「それで、今日ね……」

とまた、強襲科での話をし始める。

キンジは帰ってくるのが遅い。

そういえば理子に情報収集を頼んだと言っていたな。

俺に初めに絡んできた女子が峰理子らしい。

峰ね、ああいうのは苦手だ。

もちろん神埼もだ。

神埼の話を上の空で聞き流している、キンジが帰ってくる。

俺はまるでいないかのようにキンジと神埼の会話が繰り広げられる。

よし、役目は終えたみたいだ。

俺はソファにごろんとなり、二人の会話で重要そうな場所だけを拾っていく。

そこで、キンジはなにやら今は無理だという意味深な言葉を残す。
何でも強くなるには条件が必要らしい。

条件、ね。

チャリジャックのとき、俺はどうやってキンジが活躍したのか知らないのていまいち条件を追求することができない。

俺みたいに自分でオンできない力なのか。
大変だな。

「分かった、一度だけ強襲科に戻ってやる」

ええ!?

途中からキンジの力にばかり考えを膨らましていたので、話を聞いていなかった。

なんで、そうなるんだ?

「じゃあ、あんたも来なさい。二人とも一度だけでいいからあたしとパーティーを組みなさい」

どうやら、一度だけパーティーを組むから戻るという意味らしい。
俺は強襲科に戻りたくなかったので、「嫌だ」と言った。

「なんでよっ」

「昨日、俺は既に行ったんだよ。それで、とある事情で行きたくない」

「何よ、とある事情って」

「妹がいるんだよ。それで昨日喧嘩したから行きたくない」

「ふーん。なら、あたしと一度だけパーティーを組むのはいいわよね。それでいいわ」

意外と物分りがよくなっている。
たぶんキンジが肯定的な答えをくれたから機嫌がいいんだろう。

「な、なら、俺もそれで」

「アンタは駄目よ」

キンジも俺と同じ条件にしたいようだが、無理だった。
神埼はそのまま、荷物を持ってあっさりと男子寮を後にした。

「お前、妹いたのか」

「ああ」

「ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「俺の妹のスリーサイズは知らないぞ」

「んなことじゃねえーよ!」

妹を見るのは時々だけだが、結構大人っぽくなってたな。
悪い虫がつかないことを祈るだけだ。

「お前が、アリアに目をつけられたのはなんでなんだ？」

「……まあ、隠すほどでもないけどな。昔銀行強盗があつて、それを俺がぶちのめしたら偶然にも神崎に見られたんだよ。それで、それからだ」

「へえ」

どうでもよさそうだな。

なら聞くなと俺はキングに目潰しをしてやった。

十五話 峰理子

次の日は、探偵科で普通に授業を受ける。
よく、分かん。

「きょーくーん！」

寮に帰ろうとしたら、峰に出くわした。

能力を使っても逃げたいが、その前に抱きつかれる。

むにゅんと大きな胸が腕に押し付けられ、さらに甘ったるい匂いが鼻孔をくすぐる。

こ、こいつは要注意人物だ。

女との関係なんて男と大して変わらないだろうと思っていたが、

それは違った。

女は苦手だな。

俺は振り払い、峰から距離をとる。

「なんだよ。俺は忙しいんだ、帰ったら寝たいからな」

やっと神埼がいなくなり平和になったのだから、平和を謳歌したい。
い。

峰はくふふと笑い、「じゃじゃーん」とか言って俺の顔が映つて
る写真などを取り出す。

「これはなんでしょう！」

そこに映っているのは、俺が銀行強盗をぶちのめしたときの写真
だった。

仮面をつけるまえのものまである。

「それがどうしたんだ」

努めて冷静に言ったつもりだが、峰は見逃さなかった。

「これなぜか全然見ることができなくて大変だったけど、理子はAランク武偵。頑張ったんだよ」

「……こんなことに力を入れるなよ」

「いーじゃん。編入生のこと知りたかったんだよお」

むにゅとわざとらしく胸を押し付け、しなだれかかってくる。

俺は、ばつとまた距離を取る。

というか、この情報は親父が消しといてくれたはずだ。
だから、今まで特に問題なく過ごせていたのだが……うわ、なん
でこんなところにあるんだよ。

「さらに、こーれ」

理子はわざと写真を地面に落とす。

俺がそれを拾い上げると、きゅぴんと目を輝かせ俺の背中に飛び
乗ってくる。

「ち、離れろっ!」

俺が体を左右に振るが、半端ない力だ腕を絡ませてきて解くこと
が出来ない。

俺はとりあえず、背中に感じる柔らかい、男を駄目にする感触を
意識しないために写真に目を落とす。

それは、俺が入学試験のときに戦った写真があった。
三人と戦う写真が色々なアングルから撮られている。

……なんで、だ？

「これが、ばら撒いてほしくなかったら理子の言うことを聞いてほしいなあー？」

俺は、なるべく温厚に過ごしたい。

さらに、今は神崎に目をつけられているのだ。

銀行の件だけでも神崎にあそこまで実力を認められているんだ。

もしもここにあるすべての写真が神崎の手に移れば、俺はもう何の言い訳もできずに神崎に四六時中つけられてしまう。

ここは従っておいたほうがいいな。

「なんだよ、言うことって。あまり変な内容じゃなければきいてやる」

「うーん。難しいことじゃないよ。ただ、あまり二人に関わらないで言いたいかな」

「二人？ キンジと神崎か？」

「そつ、あの二人は、あの二人だからこそ意味があるんだよ。そこに邪魔が入ったら理子の考えが狂っちゃうもん」

「考え？ 狂う？ お前の頭は元々狂ってるだろ」

俺はほいつと思いつきり前かがみになると峰は前転の如く前に落ちてくれた。

「どうしても女の子と一緒にいたいなら理子がいてあげるよ?」

からかうように耳に息を吹きかけながら言う。
ぞくつと背筋に変なものが走る

「生憎、どうでもいい。それに、次に事件があればそこで普段の俺の実力を見せて神崎を幻滅させる。それで、関係は終わりだ。キンジと決めたからな」

「へえ……。そっか、じゃあ、この写真は私がもつとくね。じゃーねー!」

なんだったんだ、あいつ。

俺は、体中に残る甘い香りを嗅がないように鼻を手でつまみ、とつと寮に戻りシャワーを浴びた。

十六話 バスジャック

「寝坊だっ！」

キンジの野郎、俺を起こさずに行きやがった。

腕時計を見ると現在時刻は八時四十分ほど。

自転車を持っていない俺はバスで通学するのが基本なのだが、今からじゃ絶対に間に合わない。

携帯を確認すると、メールとたくさんの電話がかかってきていることが分かった。

電話のあいては……暴君 神崎か。

ディスプレイに表示された暴君という文字を確認して、メールを見る。

暴君で名前を登録しているのは俺の平和を乱している神崎へのせめての抵抗だ。

『事件が起きた。今すぐに女子寮の屋上へ来なさい。こちらで装備は準備させたから』

このメールが十五分ほどまえに来ている。

つまり、今さら遅いだろ。

周知メールも来ていたので確認すると、内容は武偵高の生徒を乗せたバスがジャックされたというものだった。

……ぶ、物騒だ。

俺は嫌々に武偵高の制服に腕を通してから、行くかと寮を出る。

ただ、俺には場所が分からない。

とりあえず高い場所に上るか。

雨が振っている陰鬱な天気の中、俺はワイヤーを駆使して高い建物に上がって探す。

すると遠くにヘリが飛んでいるのわかる。

あれは、たぶん今回の事件に関係する物だろう。

何かを追うように飛行しているので、俺は仕方なく能力を使い思いつき跳んだ。

近くまで、足とワイヤーを使って向かう。

って、都心に向かつてるぞあのバス。

レインボーブリッジに入る前に俺はへりに向かってワイヤーを伸ばしてそのままジャンプして乗り込む。

「じよ、状況は？」

中にいた少女は狙撃銃のスコープから顔を外しこちらを見る。

「まだ、状況に変化はありません」

それだけ言っただけたびスコープを覗く。

邪魔してはいけないな。

と、下で銃声がする。

俺は跳び下りて、全力で走りバスにワイヤーを放つ。

って、邪魔だこの車っ！

俺は真っ赤な車が俺とバスの間を通せんぼのように割り込んできたのでそれを飛び越え蹴り壊す。

さすがに足がちよこつといたいと思いつき横転する。

俺はバスの上に飛び乗ると、

「京！？ どうして、っーか今どうやってきたんだよ」

「詳しいことはいいから、爆弾は？」

「まだだ、アリアが俺を庇って怪我して……」

「みりや分かるって。俺は爆弾処理なんざできないぞ、適当にひっちぎって海にでも投げればいいのか？」

「そんな簡単じゃねーよ。くそ、どうすればいいんだ」

キンジが思考を開始したので俺は黙る。

というか、能力が切れちゃった。

バスにワイヤーを打ち込んで落ちないようにしっかりと捕まり、後はキンジに任せるかと考えていると。

銃声。

それはバスの底の部分で悲鳴をあげる。

バスの底の部分に、数発さらに弾をヒットさせると、爆弾らしきものが海に落ちていき。

耳に響く轟音をあげて、爆発した。

事件は、解決したようだ。

十七話 事件解決

バスジャック以降、神崎とはあっていない。

退院の日である、日曜日にあまりにもキンジが落ち込んでいたので気晴らしに出かけて、出かけた先で神崎に出会い、いろいろな情報をもたらった。

神崎が戦う理由は母親の無実を証明するためだからだ。

無実なのにイ・ウーとかいう連中にはめられて、刑務所での生活を送ってるらしい。

同情はしたな。家族に自由に会えないのはつらいに決まってる。

だから、まあ、俺も暇なときは神崎を手伝うぐらいはしようと思っただけ。

そんな休みが明けた、月曜日。

特に何もなく、一日も終わりはあと寮でごろんと寝ていると、携帯が俺を呼ぶ。

なんだだろう。

ディスプレイを見ると、遠山ネクラ。
キンジか。

「なんだ？ 家に帰ってこないなら、俺は店に夕飯を食べに行くからな」

『羽田空港に来いっ！ 第二ターミナルで合流だッ！ 頼む来てくれ！』

切羽詰ったように、キンジが言うので、俺は疑問符を浮かべながら制服に腕を通す。

ただならぬ状況だけは分かるので、寮を出ながら電話を続ける。

「つまり、どういうことだ？」

俺が改めて聞くと、状況を説明する。

神崎が乗るはずの飛行機を『武偵殺し』が狙っているらしい。

だから、一緒に来てくれと言っただが……。

分かった。神崎がピンチなのは分かった。一応礼もあるので助けに行くことに抵抗心はないが……『武偵殺し』って何？

俺は初めて聞くそのフレーズに疑問符を浮かべながら能力を発動させて一気に跳んだ。

いくら俺の身体能力が高くても、キンジから連絡を貰って二十分ほどが経ってしまった。

俺はどの飛行機がそうなのか、分からず、キンジを探していたが……見つからない。

「あの、ロンドン行きの飛行機はどこですか？」

「ああ、それなら今飛びますね」

「なっ!？」

俺の視界で走り出す飛行機。

……無理っすね。

一応キンジに、メールを送る。

『ごめんちゃい。遅れました。てへっ』

う、うぜえええ。

俺にこんなメールが届いたら、送った相手を切り裂くな。

まあ、届くのはあとでだろうと思うので、いいか。

ぴっと送信すると、すぐにメールが返ってくる。

はやっ！　と思つて開いてみると……なんだこれは！？

妹が捕まっている写真が届く。

手と足を縛られた妹の隣には仮面をつけた犯人のような男が。

続いて、妹の携帯番号で電話がかかる。

「もしもし」

『聞こえてるか？　アンタも随分と馬鹿だな。イ・ウーに喧嘩を売るなんてな』

「イ・ウーがなんだか、知らないが……さつさと場所を教えろ。ぶちのめしてやるから」

『場所お？　写真みてねーのかよ。お前の寮の近くの空き地だろうが。あーあ、つまんねーなあ。さつさとこねーと殺すからな。三十分だ。三十分で来い』

「ちっ、それまで待つてろよ」

俺は電話を切り、すぐに外に出て、能力を使つて走る。

ワイヤーを駆使して一気に戻る。

時間は大してかかっていない。

能力が切れてからもワイヤーを駆使してさつきよりも早く帰ってきた。

おかげで疲れた。

「来てやったぞ」

「兄さんっ！」

妹が涙目で、俺の名を呼ぶ。

ふざけやがって、仮面野郎。

妹が泣くなんて滅多にないことだろうが 明日雨になったらどうするんだ。

「くははは、随分と疲れてるみたいだな。どうした？」

「生憎、羽田まで行ってたからな。それより、覚悟はできてんだろ
うな」

俺がファイティングポーズをとるとさらに面白げに笑う。

「やってみるがいい。俺に勝てるのならな」

男は、瞬間消えた。

気づいたら顔面を殴られていた。

「はっはっはっ！」

右に左に現れては消え、消えては現れる。

圧倒的なスピード差に俺はこのままでは勝てないと能力を発動させる。

途端、男のスピードが一気に遅くなり、俺は向かってくる男へ、相手のパンチを喰らいながら思いきり腹にぶち込んでやる。

堅い。

腹に何か入れているのか、簡単に攻撃は通らなかったが今ので壊した。

「下手な子芝居してんなよ」

「なるほどね、確かに強い。だが、俺にはありとあらゆる力がある。まずは……」

「させるかつ！」

どがっとなぐり叩く音をくらわせる。
くらった男はあがっとなぐり叩く。
加減したけどよく耐えたな。

「はっ！」

男は、電撃を放ってくる。

俺はそれを横に飛び、すぐさま男を殴り飛ばそうとすると……手に痺れたような痛みが伝わってくる。

電撃か。

前に戦った奴らのように、自分の周囲をバリアのようなもので守っているらしい。

俺はすかさずレサを抜き、発砲するが、避けられる。

なにと俺が驚いた目で見ると、面白そうに解説をする。

「簡単だ。雷を使って自身の体に流れる電気信号を操れば素早く動ける」

そういつて俺から距離をとり、雷を放ってくる。

俺はすべて、避けて男に攻撃をしかけるが雷でガードされる。
全く通用しない。

俺はデザートイーグルも持ち、二丁で一気に叩き込むが、レサの

拳銃弾だけをすべて雷で逸らして避けられる。

こいつ、レサの能力を知っている？

「何で、レサが危険なのを知っているのか気になるが、てめえ、逃げてんなよ」

男は妹を抱えながら、どんどん離れていく。
くそうざい。

俺もそろそろ能力が切れそうなのでさっさと決めたいのだが、全くチャンスがない。

「アンタの能力も時間が関係するんだろ？ だから、こうして時間を稼いでいるんだ。ちゃんと強くなってる時間を確認しながらな」

ストップウォッチを見せてくる。

あの野郎、ゲームか何かのように俺を遊びやがって。

その後も何度も攻撃を仕掛けるが、ダメージを与えることはない。

「ほら、ほら！」

男は二つの蛇のような雷を放ってくるが俺は一つを避け、二つ目を回避することが出来なかった。

そのまま、倒れる。

妹の「兄さんっ！」という悲鳴を遠くに聞きながら。

「なるほど、約四分三十秒がアンタの能力発動時間か……つまらないな」

俺が電撃を浴びたことで、気絶したと思っていたのだろう。
近づいて、来て妹を地面に落とす。

「こいつを殺して、首でも持ち帰るか」

男は金属が擦れる音をあげて、そして……。

「兄さん、目覚まして逃げてっ！」

「誰が逃げるかー！」

俺は起き上がり、男に頭突きを喰らわせる。

さらに拳を放ち、残りの時間を思いつきりだけと死なない程度に殴り続ける。

「どうだ」

数秒後には体をたんこぶで埋めた男ができあがる。

俺は妹の拘束を外してやり、頭を撫でる。

妹は恥ずかしそうに顔を赤くして、

「兄さん。私は助けてもらわなくても大丈夫だったからっ！」

「へ？」

「バカバーカ！ 兄さんなんて大嫌いだからっ！」

へっ？ 今、俺悪いことしたか？

妹は肩を震えさせて雨の中どこかに行ってしまう。

きつと寮に帰ったのだろっが……俺はよく分からなかったがこの男を教務科に引き渡しに行ったのだった。

事件は解決した。

飛行機のほうも、俺のほうも。

あの後キンジを乗せた飛行機は『武偵殺し』を撃退して、そして、後は知らん。

これは学校にいったさいに聞いた話で、今飛行機は空を飛んでることだろう。

着陸する場所がなくて困ってるらしい。

だが、俺の知ったこっちゃない。

向こうは向こうでなんとかするだろう。

俺は連発で使った能力のせいで大分疲労が溜まっていることに今さらながらに気づき、ソファに横になった。

十八話 エピローグのようなもの

「てめえ、なんで俺が苦勞してるときに寝てんだよっ！」

目覚ましはキンジの肘鉄だった。

鳩尾にヒットして、俺は喉元にせりあがってくる胃の中のを必死に押さえて目を覚ます。

「神崎と、キンジか。俺だって向かったがな、色々事件があったんだよ。見逃してくれ」

ぼろぼろのキンジと神崎はあきれたように俺を見ている。

確かにお前等の事件に比べたら俺の件は小さいと思うかもしれないがな、こっちだって大変だったんだぞ。

「二人とも、無事だったようだな」

まあ、さして心配はしていないが。

キンジは何か秘めた力を持ってるし、神崎は殺しても死ななそうだしな。

俺はおきたついでにトイレに向かう。

リビングに戻ろうと思ったが、なにやら深刻な雰囲気が漂っているので近づくことが憚られる。

……このままトイレで時間を潰そう。

そう思っていると、神崎が「じゃーね」と玄関をあける音がしたので、代わりに俺がリビングに行く。

「どうした？」

「あ、ああ。アリアがロンドンに帰るらしい」

「それで、センチメンタルになってるのか？」

「違う、なんか足音がしない」

「神崎のか？」

「玄関の前で止まっているような……」

キンジは自分の考えを確かめる。

俺は後をついていくと、玄関の外から泣き声がする。

「泣いてるみたいだな」

俺が口になると、キンジは「ああ」と漏らしておぼつかない足取り動く。

それから、なにやら紙を取り出す。

俺が質問するよりも先にキンジが口火を切る。

「聞いてくれ」

「なんだよ」

「俺は来年には一般高に転校しようと思っていたんだ。これはそのための書類だ。けどアリアのことが頭から離れないんだ。このままあいつを行かせていいのか、分からないんだ」

キンジは顔を戸惑いの表情で支配させ、俺に意見を求めてきた。俺は、面倒だなと思いつつも、最善だと考えられる言葉を伝え

る。

「追いかけたいなら追いかければいいだろ。あいつはお前をパートナーとして認めたんだ。パートナーならわがまくらい言っても問題ない。それにお前はあいつのことを呼び戻したいんだろ。とつとこ行ってこい。後でうじうじされると迷惑だ」

「……行ってくる」

キンジは飛び出す。

俺はドアも閉めずに行きやがったあいつを微笑ましく思いながら、ドアを閉めてソファに横になる。

何かに一生懸命になる、か。

俺にもいつか、みつかるのだろうか。

それにしても、武偵高に入った瞬間こんなに事件に巻き込まれるとは……この学校は呪われてるのか？

ソファで寝ていたら、

「起きなさいっ！」

前とは違う、衝撃の強さに俺は涙が飛び出てきた。

「か、んざき……俺、死んじゃう」

「アンタもあたしのパートナーなのよっ！？ 何ぼおーとしてんの

よ。ほら、さつさとそこどく！」

「何でだよ」

「ハリーアップ！」

誰だ、神崎を呼び戻しに行きやがったのは。
誰も寮にまで連れてこいなんて言ってないぞ。

「そついや、理子がお前のことをオルメスって言うていたけどなんなんだ？」

キンジが、疲れた顔で神崎に尋ねると、「はあっ！？」と神崎が
アホな声をあげる。

俺にしたらオルメスとか、理子とか色々ツツコミたいところがあるので、キンジに訊く。

「なんで、理子がでてるんだ？」

「あー、それはだな」

言っているのか、悪いのか迷ったように頬をかく。

「『武偵殺し』は理子だったのよ」

へえー……ええええええっ！？

「マジで？ あの間抜けそうな面した奴がか？」

「そつよ」

ええっ！？　って、ことは俺に警告したのは、飛行機で神崎とキンジと戦うために？

そこまで、考えているのだとしたら……恐ろしい奴だな。

俺が理子が犯人ということに驚いていると、二人の会話が進み。

「あたしが、ホームズ四世だからよ」

「「はあっ！？」」

また、驚きの声をあげてしまう。

さっきからなんだこいつは。

俺は驚きすぎて容量を超えてしまう。

「キンジ、こいつなんで部屋にいるんだ？」

「まだ、『武偵殺し』を捕まえてないからだそうだ」

「もう、いいよ。俺がそのうちこの部屋出て行ってやるからな」

「それだけはやめてくれ。アリアと二人部屋なんて考えただけで」

「最高か？」

「最悪だっ！」

「なによ、二人ともうるさいわね」

神埼がいぶかしんでみてるので「何でもない」といって、場を和ます。

キンジは携帯を見て、ひいいつと言つ。

「どうした？」

「ぶ、武装巫女がくる。全員逃げろっ！」

「なんだ？」「なによ？」

巫女つて、星伽とかいうやつか？

確かあいつはキンジに気があつたよな。

あいつが今のこの状況をみたら、修羅場だな。
逃げておこう。

俺は寢室に逃げると、同時にドアを斬り破る音が。

二人の悲鳴が聞こえるが　聞こえないふりをして頭から布団を被った。

十九話 勘違い

あれから、俺は寝て、おきたら部屋はボロボロで、よく分からないうちに学校に来ていて昼飯になっていた。

きっと、俺が無意識のうちに覚えていてはいけないと感じて忘れたんだろう。

だから、もう何も思い出さないようにしよう。

昼飯をキンジたちに誘われたがやんわりと断っておいた。

だって、キンジの友達もいるんだ。

友達の友達は友達、なんていえるほどに俺は社交的ではない。

せつかくの友達同士、相手がいい奴らなのはキンジと仲がいい時点で分かるが、俺は変に輪を乱さないようにしよう。

というか、あいつは強襲科の連中にも一目おかれてるしで……なんだかんだで校内では慕われてるよな。

となると、俺は本格的に友達のいない、寂しいやつになるな。

妹はあの事件のあとから異常なまでに避けるしで、学校に居場所はないね。

最近、神崎とキンジも妙に仲が良かったし。

……ハイジャックのときに何かあったな。

まあ、関係ないか。

と、適当に買ってきたパンをたべて歩いていると、あれ以降顔を出していなかった星伽のやつが妙に気落ちした感じで前方にいた。

無視しようと思ったが、なんだか気になったので、話しかけてしまった。

「星伽」

「……きんちゃああん」

涙交じりでキンジの名を呼んでいた。

「おい、起きろ、朝だぞ」

昼だな。

このままだとどこかにぶつかりそうで危険だ。

「って、あぶなっ」

今、段差に引っかけたてこけそうになったので肩を掴んで支えてやる。

「え……京くん？」

「悪かったな、キンちゃんじゃなくて」

「う、ううん別に」

あきらかにがっかりしているな。
それにしても、キンジの奴も気がないならはつきりすればいいの
にな。

星伽は絶対密かに狙ってるし。

神崎もきつとキンジの事気になっているだろうしな。

「神崎とキンジは特にこれといって何かがあつたわけではないはず
だからお前にもチャンスはあるんじゃないか？」

なんで、人にアドバイスなんかしてるんだろーな。
暇つぶしにはなるので、いいか。

「え？」

「つまり、キンジは神崎のこと好きとかじゃないみたいだから、たとえ神崎がキンジのこと好きだとしても、お前が先にキンジを奪えば問題ないだろ」

「え、ええええ！ なにいつてるの！」

あわあわと星伽は顔を真っ赤にしている。

「あつ、駄目ー！」とか叫んでどっか飛んでいったぞ、精神的な意味で。

戻ってこい、目立つから。

「俺としても、神崎とキンジが愛し合うのは困るんだ」

あそこは一応俺の部屋でもあるからな。

二人が愛し合ってたなら俺は部屋に帰りたくなる。

「も、ももしかして、京くんはアリアのこと好きなの？」

「いや、ぜん」

「じゃ、じゃあ、私がキンちゃんを絶対奪うねっ。それで、それで京くんも頑張ってください、さようならっ！」

「おいっ！ 何勝手に暴走して話ややこしくしてるんだっ！」

弁解はする暇もなく一気にまくし立ててどこかに消えていった。

……まあ、誤解されたとしてもあいつの性格だ、誰かに話したりはしないだろうからいいか。

俺は、さつさとそのことを忘れて教室に戻っていった。
本当に、いい暇つぶしになった。
人助けしたあとは気持ちすがすがしいぜ。

二十話 巻き込まれを逃れる

最近、神崎による被害がなくて喜んでいた俺だったが。

学校に行っている最中にいきなり神崎から刀の峰で脳天をかちわらんばかりに殴られた。

なにすんだよと怒ると、これから毎日襲撃するからと言い残して去っていったのだ。

放課後になった、俺はキンジとともに痛む頭を押さえながらなぜこんなことになっているのか話していた。

「ようは、訓練ってことか？」

「らしいな。アリア様はよくわからん」

キンジが馬鹿にするように様づけてで呼んでいた。

俺は愚痴をキンジに言うように漏らす。

「最近、神崎には目をつけられていなかったのに……」

「そういえば、ハイジャック以降俺へのドレイ宣言が増えたような……」

「よかったあ。ハイジャックの撃退に参加したら俺まで巻き込まれてたな」

「まさか、それでこなかったのか？」

「俺だって事件に巻き込まれてたっつーの」

「知ってるけどさ。つまり、アリアはお前より俺のほうが使えら
思って俺に構うことが増えたってわけだな」

キンジはきらーんと目を光らせ、作戦を考えている。
い、嫌な予感しかないぞ。
と、ちょうどそこに神崎がやってくる。

「また、待ち伏せか」

キンジが疲れたようにため息を吐く。
確かに、毎日のように会っているのに帰りまで見かけるのは精神
的につらい。

「なんだか、京と一緒にのを久しぶりに見たわね」

「生憎、俺は二人を避けてるからな」

「どっという意味よっ！」

「面倒事はこりこりなんだよ。それで何か用か？」

「帰るわよ」

神崎はそういつて、キンジの隣に行く。
ほうー。無意識なのかもしれないが、キンジの隣を選択したとい
うことは俺よりも気を許している証拠だな。
やばっ、面白そうだな。

「おい、アリア、朝練に京も参加させないか？」

「そういえば、そうね。京の力も戦闘時にあがっていたわね。京も二重人格なのかしら……」

キンジの野郎。自分だけ巻き込まれているのがうざくて俺まで。後でアイアンクローでも決めてやろうか。

「そういえば、バスジャックのときも京は車を片足で軽々蹴り飛ばしてたな」

「へえー。だって、こいつ昔銀行強盗を三十メートルくらい殴り飛ばしてたわよ。屋上から飛び降りたりもしてたし」

「一応加減してるからな」

「……ありえんだろ」

「あんたって本気でやったらどのぐらいなのよ……」

勝手に人の話で盛り上がって勝手にひくなよ。神埼は多少興味深そうに、俺を見て、そして。

「あんた、明日は私と組み手よ。いいわね？」

「悪い、明日は犬の散歩が」

「飼ってないでしょっ!」

「妄想の」

「医者に行きなさい」

「……明日はデートが」

「あ、あんた、あたしのドレイの癖に付き合ってる奴がいるのっ！
？」

ぐおうつ！ いきなり襟首を掴みあげられ呼吸困難に。
というか、こいつはどんだけ独占欲が強いんだよっ。

お前キンジのほうで、好きだろうがキンジに嫉妬してる。
まあ、彼女なんていないし作る気もないが。

「離せっ、この」

「いやだ！ あたしのドレイは誰にも渡すもんか！」

「どこにもいかねーからっ！ お前とずっと一緒にいるからっ！」

って、言葉の選択ミスった！

確かに言いたいことを短くすればこうなるけど。

キンジが「ええ……」と唸っている。

神崎も勘違いしたらしく、俺から離れて口をあわあわさせて顔を
真っ赤にしてキンジの後ろに隠れる。

「誤解だー！ー！俺に彼女がいることからすべて誤解だ」

「は、はあぁっ！？」

神埼がぎゅるんぎゅるんとツインテールを振り回しながらどなる。
剣幕は凄まじく、怒りでキンジの腕の肉を引きちぎろうとして

いる。

「さっきのはなんなんのよっ！」

「だから、朝練がめんどつくて適当に理由考えたらおかしなことに
なったんだよ。俺はそもそもロリコンじゃねーしな」

「ロリ、……あんだ、それどういう意味よ」

「やべっ、つい本音が」

「本音つてなによっ！ これでも少しずつ成長してるんだから……
風穴っ！」

神埼が、今度は拳銃を抜いて追いかけてくる。

俺はやむなく能力を発動させて違和感がない程度に逃げていると、
ハンドレッドパワーのおかげでよくなった視力が、気になるものを
目にとめたので立ちどまる。

神崎を押さえつけてから。

「おお、ライオンを取り押さえてる」

「誰がライオンよッ！ キンジ後で風穴だからっ」

「ひいっ！」

アホは放っておいて、俺が「二人とも掲示板みる」というとまだ
激しい興奮状態にいらながらも二人ともみた。

『生徒呼び出し 2年B組 超能力捜査研究科 星伽白雪』

星伽が呼び出しされるなんて珍しいな。

周りでもよく話題になる星伽は、品行方正、眉目秀麗な人間だ。キンジのことで暴走するのは知っているが、それは学校では表にすることはないので、つまり問題を起こすような人物ではない。

なにやら、事件の香りがするな。

このままここにいたら、まずそつだ。

神埼がそれを見て落ち着いたようなので、そつと体を解放して、その場から退散した。

ハンドレッドパワー、さまさまだ。

二十一話 白雪との会話

「突然でごめんなさい！」

星伽が、土下座して謝る。

俺がさせているんじゃない、勝手にやっているのだ。

俺は「別にいいから」と苦笑して、改めて事情を思い出す。

星伽が呼び出しされていたのはボディーガードをつけるということとだったらしい。

キンジと神崎は教務科に盗み聞きにいき、そのままそれを引き受けた。

そしたら、星伽がキンジの部屋で二十四時間体制ならいいと提示して、今にいたる。

「……本格的にいづらくなったな」

キンジを取りあう二匹の動物。

俺がいるとややこしくなりそうなので、できれば誰かの部屋に泊めてもらいたい。

そういえば武藤とかいうキンジの友達が俺に同情してたな。

それで携帯のアドレスをいつのまにか交換したし、泊めてもらおうかな。

「ボディーガードにはあんたもつきなさいよ」

「……俺まで？ 勝手に決めないでくれ」

「あんたはドレイなんだからご主人様の命令は聞きなさない」

やけに語尾を強く言い切って、何かを設置にいった。

なんでも魔剣とかいてデュランダルとよむ、イ・ウーのメンバーに星伽は目をつけられている。

だから、色々対策をうつているらしい。

俺にはよく分からないが。

荷物運びを手伝って、それからキンジはどこかに出かけ、アリアもでかけようとしたので引き止める。

「なぜに主犯が逃げる？」

「あたしは用があるのよ。それまでアンタに任せるわ」

「用？ それは星伽のボディガードより大切なのか？」

「そうよ。さっき説明したのにつけたすなら魔剣は超能力者デュランダル ステルスなのよ」

「ス、ステルス？」

そういえば学校の授業で聞いたことがあったな。

なんだっけ？

消えるのか？

「ステルスってなんだっけ？」

「武偵なら自分で調べなさいっ！ あたしはそいつ対策をしにでかけるの。正当な理由でしょ？」

ふんと振り返るとツインテールが後を追うようにして俺の顔面にぶつかる。

何かの花の香りが顔に張り付くように残る。

この香りは……シャンプーか？

女つてのはシャンプーとかも結構気にするのだろうか。

俺なんて子供用のリンスとシャンプーが一緒のを使つてるといふのに。

神埼に「子供用の使つてるなんて……ぶぶ」と言われたときは腹が立つたが、リンスとシャンプーの違いもよく分からない俺は結局それを使い続けている。

次の日にシャンプーハットをプレゼントしてやった。

って、現実逃避もいい加減やめるか。

「そ、その、作戦会議しましょう」

「？ まあ、いいけど。なんのだ？」

「京くんとアリアをくつつけるのと私と……キンちゃ　ふおうつ
！！」

「妄想して爆発するなッ」

星伽がいやんいやんと頬に手をあてて首をふりまくる。

逃げてえ。すべてを放棄して逃げてえ。

星伽の誤解をとかないといけないのも面倒だし、星伽の相手をするのも面倒だ。

キンジが星伽が苦手だというのも分かるな。

俺は、突如誰からか見られているような気がして、窓の外を見る。気のせいかな。

本当にデュランダルじゃないよね？　今疲れてるから相手にしたくないぞ。

「まず、京くんがアリアに夜這いかければいいんだよっ！」

「次の日俺の墓ができるな」

「まずは名前で呼ぶのは？　アリアならそういうの気にしないと思うよ」

「俺は人と距離をおくためにできるだけ名字で呼んでるんだ。星伽」

わざと、しらしめるようにいうと、星伽はちょっと嫌そうに顔を逸らした。

そういう表情をするんだな。

他人の前では常に優等生の余裕の笑みを携えている星伽とは違い印象的だ。

「私のことは、白雪でいいよ。星伽は私姉妹がいっぱいいるからなんだか慣れてないし」

「いまいち、理由になってないが……」

気持ちは分からないでもない。

星伽がどうして巫女の格好をしているのかキンジに聞いたことがあった。

家が神社だから、キンジはあまりよさそうには話していなかった。星伽の家は基本外に出ちゃだめらしい。

全く変な家だよな、まるで監禁してるみたいだ。

星伽という名前を嫌ってるわけではないが、白雪としてはこっちでくらい忘れたいのかもしれない。

「わーったよ、白雪ね。白雪、白雪……」

「じゃあ、アリアもそれでね。次はそうだ、巫女占札をするね」

「占い？」

急に巫女らしくなったな。白雪の巫女服は見ていたが、なんだか日本刀をぶんぶん振り回してるところを目撃したほうが多かった。巫女に対してトラウマを覚えるほどにそちらのほうが多かったの。最近では巫女ということを忘れかけていた。

「恋占いで、いいよね」

「なんでもいい。あと将来俺がどんな仕事やってるかとか分かる？」

「うん、できるよ。先に恋占いからね」

どれぐらい的中率が知らないが、俺としては会話をとぎれさせるのは良くないということ。二つ占ってもらうことにする。

できれば平凡な答えではなく話のタネになるような面白いのを期待する。

「……京くん。頑張つて」

占い結果こわっ！

白雪の顔が心労で倒れそうなほどに同情で染まっていた。俺はいつたいどんな恋をするんだよ。つか恋するの？ しちゅうの俺よ？

「それは、俺が誰かと付き合うということか？」

「うん、そうだよ。誰かはわかんないけど」

まじかよ。できれば白雪に占ってもらわなければ良かったな。
なんか、意識すると恥ずかしいな。誰かわからないということが
余計にダメージが来る。

「次は、将来だっけ？」

「おう」

こっちのほうが気になる。

将来どんな仕事をしているのか。小説家になれているのか。
密かに今でも賞に応募するために書いていたりするんだぞ。

「……」

白雪は難しそうな顔で顎に手をあてていた。
すごいやばそうな雰囲気漂ってるんだけど。

「……正直に言うと、分からない。何も、すべてが真っ黒」

「近い将来に死ぬのか？ 俺は」

「こんなこと、初めてだから、分からないよ」

白雪も戸惑っていた。

俺はふうーと息を吐く。

後で、キンジには占いの効果がどれだけあるのか聞こう。

よく外れることを切に願う。

頭を変えるように切り替えて、

「んじゃあ、細かいことは忘れよう。それより、お前とキンジのことだ」

さっきまで一方的に言いやられていたのでここらで反撃だ。

「まず、これ持っておけ」

お守りを渡す。巫女にお守りを渡すのもなんだか変だな。

というか、これは親父の友達に作ってもらった見掛けはお守りだが発信機の機能を備えている。

その人曰くたとえ海底一万メートルのところにおいても、分かるし大げさにいったら異世界にいてもわかるらしい。

異世界ってあの人（顔は見たことないが）ゲームのやりすぎだ。

しかもよつぽどのがなきゃ見つからない。専門の機械で調べても発信機だとわからずスルーされるといった。

「恋のお守りだ。それに『キンちゃん大好き、大好き、大好き』って言い続けられれば願いが叶うぞ」

「ええっ……！」

白雪は焦ったように叫び、俺から逃げるように後ずさったので、そのあとしつこくキンジにどうすれば好感度があがるか教えてあげたのだ。

全部適当だが。

二十二話 別行動

あれから特に進展があつたわけではないが、面白そうにしているので俺は言うことはなにもない。

今日は、アリアは何かの用があるようで、帰りが遅い。

俺も、キンジと白雪と一緒にさせようと家に帰る時間を遅くする。既に時計の針は十時を回っており、そろそろ帰ろうかなと家に向かうと。

アリアのかんかんアニメ声が響き渡る。

まったく、どうせアリアがキンジと白雪がいちゃいちゃしてるとこでもみて嫉妬したんだろう。

「うるせえぞ。近所迷惑も考える」

「あ、ん、た、ね、えー！」

声を震わして、俺に拳銃を向ける。へ？ いや、なんですか？ 白雪を見ると、なんかすっげえ服がはだけている。

「あんたがいけないから二人が、そ、そのふふふくを脱がせあうなんて暴拳にでたんじゃないっ！ あんたどこで何してたのよ！」

俺は、海に向かって水切りしたり、ワイヤー使ってブランコしたり……。

だ、駄目だ。正直にいったら寂しいし、何より殺される。

「ちょ、ちよつと依頼を受けに……」

「どんな？」

「ぶ、ブランコで、ぶーらんぶーらんと」

「風穴」

パンパンと俺に向かってくる銃弾を能力を発動させて避ける。そのまま、ドアを閉めて背中に感じるトラックが突進してくるような衝撃に耐えながら、

「どうしよ……」

キンジは中にはいなかった。

すでにアリアによって葬られたか。

さらば、キンジよ。

俺はドアの前から離れて全力疾走で逃げた。

そういえば、アドシアードとかいう競技大会があるらしい。

生徒はなにかしらの手伝いをしないといけないらしく、裏方での準備を手伝っている。

昨日はキンジは熱で学校を休んでいた。

キンジはアリアに海に突き落とされたせいだって怒ってたな。

今頃、キンジたちは強襲科施設でバンドの練習だろう。

頑張れ、としかいえないな。

「それ運んでください」

他の生徒から言われたので、よっこいせと荷物を持って運ぶ。
裏方っていうのは存外なものだ。

本番に人目が集まる心配がないので俺にはいいことだ。

そんな感じで仕事に力を入れてみると、

（アリア？）

アリアが走っていく姿を遠めに確認した俺は荷物をとっと運び、
後を他の人に任せてアリアを追う。

下手に逃げられると白雪の護衛が面倒になる。

キンジはやるときはやるようだが、今は使い物にならないしな。

「アリア、勝手にボディーガードをやめるな」

「あ、あんた、なんでここにいるのよ」

アリアは今にも泣きそうな目で、俺を見つめてくる。
だけどもばれないように目をこしこしと拭っている。

「お前こそ白雪のボディーガードを放棄してんなよ」

「あたしは……。ねえ、あんたは魔剣はいると思ってるの？」

「魔剣どころか、なにも事情を説明せずにいきなり俺にあれやれこれやれと押し付けてるだろうが」

「魔剣がいるって信じてる？」

俺が誤魔化そうと口頃のぐちを告げているとさらに確認するよう
に追い討ちをかけてくる。

何かにすぎるようだな。

今ここにいるのはキンジと喧嘩したのかもな。

「しらねえーよ。ていうか、俺はこの学校に入ったのもつい最近でほとんど何も知らないんだからな。今は知ってる奴の後ろについていくしかないさ。だから、アンタが、アリアの後ろをついていくさ」

俺がなれるまではな。

実際アリアとの会話は面倒なときもあるがためになるときもある。キンジとだってそうだ。二人とも俺にとっては先輩なんだ。

「もうすぐ、魔剣が白雪を襲うのよ。でも、あたしは口では説明できない。あたしにそれは遺伝してないから、うまく説明できないのよ」

確か、アリアはホームズ四世だったか。

キンジが驚いて俺に報告してくれたのを思いだす。

今は、アリアを慰める言葉でもさがしてやるか。

「わかった、わかった信じてやるよ。で、お前はこれからどうするんだ？」

「しばらく、あんたたちとは距離を置いて行動するわ。じゃーね」

結局、アリアとはそこでわかれた。

魔剣が近づいている、か。

キンジには常に白雪の近くにいてもらうように伝えておこう。

アリアの言葉を信じるならすでに敵はこの島にいるのだろうし。

二十三話 スーツ

アドシールド当日。

前準備を頑張った俺は今日はほとんどやる仕事がなかった。

なので、俺はそこら辺を探索して、アドシールドというものを楽しんでいた。

いや、楽しめるようなものなんてなかった。

みんな殺気だつていて、「なんでこいつこんなところにいるの？」みたいな目で睨んでくるんだ。

よし、もう学校をふけてしまおうか。

いや、授業で聞いたがこういうイベントのときこそ気を引き締めなければならぬときいた。

人が大勢はいる今日のような日が敵としては狙い目なんだそうだ。

……キンジはしっかりと白雪のボディガードしてんのか？
気になった俺はキンジに連絡をいれる。

でないな。ついで、あまりしたくはなかったが白雪に連絡をする。

でないな。

さすがに不安になってきた。

俺はふと白雪に渡した発信機が気になった。

だが、あの電波を追うにはスーツを着ないといけない。

ここで、スーツを着るのもなあ。

着るとしたら、戦闘があるときに行きたい。

と、思っていた俺の元へ周知メールが届いた。

『超能力捜査研究科 星伽白雪が半日ほど行方をくらましている』

といったメールの冒頭から始まり俺はさらに読み進めていく。

……仕方ない。俺は人目がないのを確認してから、スーツを着るためにポケットにいれていた携帯のようなもののボタンを押す。

すると、一瞬で装着が完了したので正直驚きが隠せない。

『ふむ、初めて着たね』

と、頭の中に声が入り、視界の片隅に女性の映像が映る。
見た目は俺と同じくらいの女の子。

「お、おまえ誰だよ」

テレビ電話のようなものらしく、つい聞きかえす。
確かに細かい使い方は着用したときに教えると聞いていたが……
まさかな。

『私がああなたのお父様の知り合いの娘の色々武器の開発をしていた
ものだよ。まあ、いい。事件が起きたんじゃないか？』

「そつだ。発信機の使い方は？」

『それは君の体の状況などをすべて把握して心にリンクしているの
で、思えば使うことが出来るはずだ。腕の部分にはワイヤーを放出
する道具も仕込んでいる。他の説明はあとでいいだろう。君は不思議な
能力を持っているんだよね。それについても調整してあるから
問題なく使ってくれて構わない。なお、これは録音されているので
自動的に切れます』

しゅんと消滅した。

……今の全部録音か。

まるで、こちらが聞く内容をすべて把握していたんじゃないかと
いうほどの応答率だ。

そついえば天才だもんな。

俺は心で発信機と願ってみると、本当に視界に地図が現れ赤く点滅する。

きつと赤く点滅しているところが、白雪の居場所なのだろう。なんていう科学力。何十年先に進んでるんだか、タイムスリップした気分だ。

場所は、地下か？

俺がそこに向かおうと走り出すと、携帯が振動する。

「キンジか」

携帯のディスプレイを見ると、遠山キンジ（まえに見られてキンジとアリアにぼこぼこにされて名前は戻した）の名前が。

『白雪が、魔剣に……！』

要領のつかめない話であるが事情を分かっている俺はすぐに告げる。

「今白雪の居場所に向かっている所だ、詳しい場所は分らんが地下のようだ」

『地下？ ……^{ジャンクシヨン}地下倉庫か！』

「ジャンクシヨン？」

確かキンジが前に話していたな。危ないから近づかないほうがいいと。

『どこだ！？』

「詳しい場所まではちよつとな、独自で探してみるからとりあえず電話をきるぞ」

俺は返事を待たずに電話を切る。

正直今のキンジは焦っていてうるさい。

俺は地下に向かうためになるべく人通りの少ない道　目立つから　を選びながら進んでいく。

しばらく、走っていたがいまいち分からない。

地図を見てもどこから入れば近いのかまではわからない。

こりゃ、手に持てる地図を買ったほうが早いかな？

と、なにやら矢印模様の銃の跡を見つけた。

……誰だ、こんなことするやつは。

でも、これを追っていけば行けるかもしれない。

他に頼るものもなかったたのでそれをあてにすることにする。

歩いていくと、排水溝が外されているのがわかる。

「先に誰が行ったのか？」

キンジか、アリアか。又は犯人か。

いや、犯人ならわざわざ目立つようにあけておかないか。

中に入ってどんどん先に進んでいく。

エレベーターを乗ろうと思ったが動かない。

ハシゴをおりて、おりていくと段々と白雪に近づいていく。

この先に誰がいるのか？

赤い点が止まったままだ。

地図が消えて、ぴぴつと三つの光が現れる。

生命反応、らしいな。

数は三つで、白雪、敵、誰かだろうな。

俺は現場に近づいていく。

って、ここは火薬庫か、危険だな。

ひょこつと顔だけを出して中を覗くと。

ターゲットを見つけたように、キンジが映る。

今は声をかけるのはやめよう。

中には他に二人がいるようで、会話も細々と聞こえる。

キンジが攻撃をしかけるのにあわせて、いや、キンジがピンチになつたら飛びだそう。

「白雪逃げろ！」

キンジが飛び出した！

俺もキンジを驚かさないように移動して、先程聞いた説明どおり思い、ワイヤーを放出する道具のようなものが腕の部分から現れ俺の手に握られる。

腰に重さがあるので、確認すると俺の愛用の拳銃が腰についている。

なるほどな、って今はいいか。

キンジが途端に足を止めた。

なんだ？　ぴぴつとスーツが冷気を確認して、相手は超能力者だとでる。

アリアが、なんかいつてたな。

俺は見えない敵、だが勝手に標的をロックオンするので、ワイヤーを放つ。

自分で狙うが、どこに打てば相手に当たるかできるので、随分らくだ。

これで、敵か、白雪を捕まえられれば十分だ。

「くっ！」

たぶん捕まえたのは、魔剣のほうだ。
ずるずると自動で引いてくれるのだが。

戻ってきたのは先が切られたものだった。

「ちっ、逃げられたか」

と、思ったら、ぴぴっとなる。

今度はなんだと思ったら、逃げる赤い点とどこかに固定された赤点が映し出された。

そこで、キュピーンと来た。

さっきのワイヤーって発信機的なあれか。

それで、今魔剣の腕にでもついているのだろう、巻きついた部分が。

後を追うか。

「お、お前誰だよっ！」

キンジが俺を見て、怖がるように叫ぶ。

あー、顔が見えてないからわからねーか。

顔の部分を上にあげることにはできるようだが、説明は面倒だし、世間様にばれるとさっき映った女の子が大変そうだ。

「なに、通りすがりのヒーローさ」

俺はそれだけを残して、先に進む。

「き、キンちゃん！……誰？」

白雪にも似たような反応をされる、

「君の友達は無事だ。それより魔剣はこの上にのぼっていったのかい？」

梯子を指差すとはてな顔ながらも頷く。
確かに、動いている赤い点は上にいる。
てか両方とも赤だと分かりにくいな。
青になれと思ったらほんとになった。すごい、科学すごい。
俺は白雪を後から来るだろうキンジに任せて魔剣捕獲に動いた。

二十四話 スーツでの戦闘

梯子をのぼり、点を追いかける。

と、思ったら、点が突然動かなくなった。

……動きをとめたか、気づかれて外されたか、か。

気づく可能性は皆無に近いだろ。実際白雪の発信機は気づかれることがなかったのだ、相手は気づいていないはずだ。

単に腕についててうざかったのだろ。

とりあえず、点滅していた場所まで向かう。

ここら辺は明かりがあり、さっきの階層よりも見やすい。

敵の奇襲に気をつけながら取られたワイヤーがあった。

「はっ！」

ぴぴっと、一瞬遅れてだが生命反応がして、後ろから切りかかる。

何とか前に転がるようにして避けたが、危なかった。

姿を見ると、銀髪のような長い髪をした、美人に分類されるような人間だった。

犯人が、女か。男のほうが思いっきり叩けてらくなんだがな。

「誰だか知らないが、一人で来てくれるとは好都合だ」

腕から、ワイヤーを放出する道具があわれ、俺はそれを握り、放つ。

今度はつくまえに斬りおとされる。

なんどかきた斬りつけをよけていた、俺は、ふと、足を取られた。氷。そういえばさっきも冷気を感じていたし、つまり魔剣は氷の超能力者か。

「死ね」

滑った俺にでかい剣を突き刺すようにして向けてくる。

俺は、能力を発動して、生きている片足だけを使って横っ飛びした。

あぶねーあぶねー。

俺は、対能力者用拳銃レサを取り出して、抜きざまに発砲する。

魔剣は驚いたように、剣で弾き氷を放ってくる。

それを避けて、思いつきりジャンプして殴る。

壊れたのは地面だけだ。

「やるな、デユランダ魔剣」

俺は首を捻って骨をならしながら、にやっと笑う。

まあ、相手には見えていないだろうが。

「私の名は、ジャンヌ・ダルク。人につけられたその名は好きではない」

「ジャンヌ・ダルク、ね。よし、とっとと倒すか」

「ただの武偵如きで、超偵に勝てるわけが……ないっ！」

早い動き、だが、俺にはゆっくりとしか映らない。

剣の攻撃をよけ、追加で来た氷も避けて吹き飛ばすように腹を殴る。怪我はしないように調整した。

派手にとび、近くの壁に背をぶつける。

俺は、ふうーと息を吐き、追撃をしかける。

拳と蹴りを、何度も浴びせるが、何とか自慢の剣でガードしてい

る。

剣が堅いな。

本当は一発で殴って壊してやろうと思っていたのだが、全くびくともしない。

せめきれない。圧倒的に戦力では勝っているが、戦いの経験が少ない俺はどうしても攻撃が単調になってしまう。

親父には俺の百倍でも一撃も攻撃をくらわせることはできなかった。

防御に専念すれば、動きが読みやすくて守りやすいらしい。

「貴様、何者だっ」

「名前なんかねえー！」

俺が思いつきり回し蹴りを放ち、ジャンヌ・ダルクの剣の腹にぶつける。

痛い、足がひんまがりそうだ。

「くっ」

なぜか、一步も引かずその場で、俺の拳の一撃をすべて剣でガードする。

俺が連続で殴るにも関わらずすべてガードされるので、足をあげようとしたときに異変を感じた。

ぴしぴしと俺の足が頑丈な氷で動けなくされていた。

よくよく意識すると、スーツのなかの足まで冷やされていることに気づいた。

しまった、完全に攻撃に集中しすぎていたようだ。

おらっ！　と思いつきり、氷を振り払ったがぐらりと体が倒れる。

「はっ？」

足に、うまく力が入らない。

くそ、身体能力とかじゃなく、まるで筋肉を抜き取られたような感覚がない。

「魔女の、氷は毒といってな。しばらく満足に立つ事は難しいと思うぞ」

にやっと勝ちが決まったように俺を見下ろす。

「氷像にして、全身を動けなくさせてやる」

俺は、やばいとまだ動く手で、ワイヤーを取り出して近くの壁に打ち付けて距離を取る。

着地するが、うまく立てず、再び倒れる。

「狩る側が入れ替わったな」

嬉々として追いかけてくる。

『能力終了三十秒前』

やばい、俺に不吉を伝える警告音だ。

残り、三十秒。俺は、ワイヤーを使って距離を取ることしかできない。

いや待てよ。今秘策を思いついたぞ。

足の先はうまく動かないが太股は動く。

これで戦おう。

「どうした、逃げるのはやめたのか？」

俺が座り込んでいるのを見て、そうだったのだろう。

「いやーな。秘策を思いついたんだ」

「ならば、見せてみるっ！」

剣を向けて走ってくる。

というか、アリアたちまだ来てくれないのか。

俺は逆立ちになって、脚のすねで思いつきり剣を蹴りつける。

予想外の攻撃に耐え切れず吹き飛ぶ。

追撃したいが、さすがに逆立ちじゃそこまで早く追いかけれない。

「待て、このっ！」

「な、なんか気持ち悪いっ！」

ジャンヌ・ダルクが逃げたっ！

こっちは時間がないんだから逃げるなっ！

逃げながら氷で攻撃を仕掛けてくるが、全部脚で粉碎する。

『能力終了五秒前』

ぬわああー！！！！

俺は両足で立とうとしたが、結局うまく立てない。

歩こうとすると倒れる。

そして、能力が切れた完全に立っていることができない。

俺の倒れた音を聞いて、ジャンヌ・ダルクが振り返る。

俺はワイヤーを駆使して逃げまくった。

二十五話 三巻への移行

結局、逃げているうちにアリアたちがやってきた。

俺は文字どおり高みの見物で、ワイヤーにぶらさがったまま三人の戦いを見ていたが、すぐに戦いに決着がついた。

「くそ、あの変な格好をしたやつに超能力を使いすぎた」

ジャンヌ・ダルクが、白雪に斬られた聖剣デュランダルを落とし、アリアたちに手錠をかけられる。

「それにしても、さっきの変な格好をしたやつは誰だったんだろうな」

キンジが声をもらす。

ここって結構音が反響するのか、離れた場所にいる俺にも声は届いていた。

「私の知り合いじゃないよ、キンちゃん」

「あたしは、見てないわよ。でも、そいつのおかげでジャンヌも早く捕まったし、感謝ね」

それ、俺だからな。

「それにしても、京はまた来なかったわね」

アリアが天井に向かって発砲しそうなくらい怒っている。。
来てるから、顔をあげればそこには俺がいるからな。

「いいじゃないか、二人が無事なんだからさ」

キンジが気持ち悪いことを言っていた。

……あれがアリアを認めさせたキンジの隠された力なのか？
気障な態度を取ることからかなり気持ち悪いと想定される。

「あ、あいつ、後で調教しないと」

アリアが、物騒なことを言っている。

とりあえず、早くそこからいなくなってくれないかな？

俺が帰れないだろ。

三人はしばらく話したあと、外に向かって移動したので俺も飛び降りて着地に失敗して引きずるように帰った。

それから、アドシアードのチアを見て、俺は寮に戻って寝ていた。
アリアから二次会なるものに誘われたが、どうせぐちぐち文句を
いわれに行くだけなんだからわざわざ行かない。
疲れた。

最近、キンジは寮に帰ってくるのが遅くなったな。

本人曰く下校拒否らしい。無理もないか、アリアにあれだけトラウマの如くいじめられてればな。

ちなみに、俺も昨日アリアに散々振り回されてへとへとだった。
今日の七時を回った頃、アリアから連絡がきていた。

『キンジ、今寮に帰ってる？』

「いや？ どうした？ 何かあったのか？」

『あたしから電話が女子寮に呼び出したんだって』

「？ なら、女子寮にいるんじゃないか？」

ていうか、女子寮に呼び出して何するつもりだ。

『あたしは呼び出してないのよ。だから、あたしは情報科にいつてから女子寮に向かうわ。あんたは先に女子寮に向かって』

「いや、なんで、俺が」

『あんたとあたしはなんだかんだで一緒に行動する機会が少ないわ。いざ二人で戦闘を行う際にそれじゃいろいろ問題あるでしょ？』

「お前がキンジと組んでればいいだろうが」

最近キンジとばかり組ませるように一人での行動を増やしているのに向こうからアプローチをしかけてくるとは。

『あんたは、あたしの初めてのパートナーよ』

「なった覚えはない」

『いいから来なさい。こなかったら風穴』

アリア様は相変わらずの暴君ぶりだ。

俺は仕方なく、身支度を済ませて、拳銃は持ち歩かなくていいか。腕につけるワイヤーを発射させる機械（見た目はリストバンドのようなもの）をつける。

これを使うのは入学試験のとき以来かもな。

寮をでて、歩いて女子寮に向かった。

二十六話 ドロボー

すでにアリアはいなかった。

女子寮で聞き込みをするとアリアはどっかの階層に向かっていたそうだ。

呼んどうて勝手だな、おい。

俺は歩いていき、聞き込みしながらアリアが向かったと思われる部屋を探す。

途端、ある部屋から強烈な光がドアの隙間から漏れた。

あそこは、アリアが向かったと思われる部屋だな。

俺は走ってドアを開けると、中には二人。

アリアとキンジが目を押さえていた。

「お前ら何やってんの？ 泣く練習？ 演劇部にでも入ったのか？」

「その声は、京か！？ 窓の外を見てくれっ！ 理子がいたら追ってくれっ」

俺は言われたとおり、外を覗くといった。

「アンタ！ 逃がしたら風穴の刑だからっ！」

「いまいち事情がわかんないけど……」

俺はワイヤーを屋上の手すりに引っ掛けて、上る。

これ、マジで便利だな。

「さて、屋上にきたが。正直あまり関わりあいのないお前と対面してもなあ」

峰がいた。

「ひっさしぶりー！ きょーくん元気だった？」

「今元気がなくなっただな。それより、何しに来たんだよ」

逃げる様子はないので、欠伸をしながら聞くと峰が猫のように擦り寄ってきた。

「理子ね、頼みたいことがあってきたんだけどね。アリアもキークんも全然話し聞いてくれないんだよ。だから、きょーくん、話聞িয়েくれる？」

うるると目に涙を溜めている。

甘い、甘い、胸焼けがしそうな濃厚なバニラの匂いが鼻に入ってきて俺は峰から距離をとる。

「峰・理子・リュパン四世　今度こそ逮捕よ！　ママの冤罪償わせてやる！」

「見張ってやってたぞ。俺、もう帰っていいか？」

二人と入れ替わりに俺はあまり被害を被らなそうな場所へと移動する。

アリアと峰は、激しい口げんかをしている。

「京とキンジ、援護しなさい！」

生憎、武器持ってきてないんだが。

俺は腕を組んで二人の戦いを見続ける。

俺が、ハンドレッドパワーを使わないとできそうもないことを簡単に言っている。

バケモノ共だな、おい。

とても参加できそうになかったので、俺は成り行きを見守っていたが、最終的に醜い口喧嘩へと移行した。

俺は喧嘩とめに入るかと思ったら、それよりも先にキンジが動き出した。

俺は身の毛もよだつ気障な台詞を放つキンジから離れる。

子猫ちゃんとか、なんだよ。

あと、キンジは今アリアが言っていた二重人格の片方のほうだろう。

確かに、二重人格に似ているな。

異常に女に優しくなってるし、何かきっかけがあって変身するのかもしれない。

今度は一緒に戦う所を見てキンジの能力でも推察するか。

と、キンジの弁舌をきいていて、いろいろ分かったことがあった。まず、司法取引とかいうものをして今の峰は犯罪者ではない可能性が高いということ。

そして、キンジが気持ち悪いこと。

もう、俺はいらないかもしれないな。

峰が用があるのはあの二人みたいだし、帰るか。

「アリアとキンジのせいでイ・ウーを退学になっちゃたの。しかも負けたからってブラドに 理子の宝物を取られちゃったんだよおー」

イ・ウーで前に聞いたことがある。一番最初の雷使った妹を誘拐した奴と確かジャンヌもそこにいたらしいな。

というか、妹……。最近全然あつてないな。

兄としては寂しい物だ。

って、そうじゃない、イ・ウーてのは学校みたいなのか？ 退学
って。

「ブラド。『無限罪のブラド』……！？ イ・ウーのナンバー2じ
ゃない……！」

へえ、そいつって強いのか。

最近、戦いが好きになってきた俺はなんだか今から体がうずいて
いる。

それに、ジャンヌとの戦いで俺の弱点もわかったしな。

今度アリアと勝負でもするか。武器なしの接近戦オンリーでどれ
だけ戦えるか。

実戦経験が少ない俺が少しでも強くなるにはそれしかないな。

「一緒に ドロボーやろうよ！」

そうだ、強くなるにはドロボーしないとな。

あれ？ また話についていけないぞ、俺。

二十七話 体力測定

後で聞いた話だが、峰の大切な物を奪い返すにあたり、戦闘はできるだけ回避するために泥棒の話が出たらしい。

翌日の放課後帰宅した俺たち三人は作戦会議をしていた。といっても、やるか、やらないかの会議だったのだが、今は峰とキンジの関係についてアリアが言及している。

「へんなことされて……アンタ、理子のトリコになっただんじょっ！」

まるで、彼女が彼氏に怒るようだ。

へんなことされてって、アリアはそれを見ていたのか？
面白そうなので、とめはしないが。

キンジが、「フォローしてくれ」と耳打ちしてくるが、フォローするだけの材料がないのだから、無理に決まっている。

「ど、ど、どんなハレンチなことされたのよ！ 白状しなさい！」

「アリア」

「何よっ！」

「キンジはいつからいつもと雰囲気が変わった？」

「へ？」「なっ！」

俺は、今キンジの能力について把握したいと思っている。

本人には前に聞いたが、嫌そうにしていたので勝手に調べることにした。

「そういえば理子のむ、むむむ胸に溺れた後くらいよ」

「胸に溺れるって。キンジお前意外とやるのな」

「京ー！ ちょっとこっちにこいつ！」

襟首を掴まれてアリアに聞こえないようにキッチンにつれてこられしゃがむ。

「何聞いてんだよ！」

「俺はお前の能力について知りたいからな。今絶賛検索中」

「……下手なことを言われる前にお前には教えてやる」

「おっ、とつととしてくれ」

「俺のはな……性的に興奮すると、あるモードになるんだよ」

「性的に？」

だから、峰の胸で溺れたときに覚醒したのね。

「そうになると、いつもと違って女性を守るのを優先して気障な台詞を吐くんだよ。分かったら変な詮索はやめてくれ。アリアにばれたら俺の人生真っ暗闇だ」

「すでにかなり闇だな」

「言わないでくれ」

「あんたたち！ 何こそこそしてんのよ」

そこで、アリアに連れ戻されてソファに座りなおして会話が続く。結局はアリアがキンジのことが心配であと、やきもちやいてるだけなんだということが判明した。

白雪、どっかいつてるとか聞いたが、これだとアリアに盗られるな。

「京も、理子の色仕掛けにかかっちゃだめよ」

「知らんし、そもそも峰が興味あるのはキンジだろうが。俺はそこから辺に生えてるじゃがいもみたいなもんだろ」

「じゅがいもはそこら辺には生えていないだろ」

キンジがツツコミをかましてくる。

そもそも、峰とは携帯のアドレス交換していない本当に縁の遠い人間だ。

だから、アリアが心配するようなことはたぶん、ない。

一回からまれたこともあったが、あれは例外、イレギュラーだと、そんな俺の元へ一本の電話が。

相手は、知らない番号だ。

でるかでまいか悩んだがアリアに「電話早く出なさい。うるさい」といわれたのでると

『やつほうー。りっこりんであーす』

「……携帯握りつぶそうかな？」

『なにになにー。照れ隠しかー？ きょーくんは可愛いねー』

「アリア、お前に用があるって」

俺は電話の相手をするのが面倒になったので、アリアに放り投げる。

「だれ？」

「俺の妹」

「あつ、知ってるわ。前にあんたのことを色々聞いたことがあったわ」

「あつそ」

俺はソファの背にどっしりとおっかかり天井を見上げていた。

「確か、お前の妹ってAランクだったよな。親父は武装検事」

「そうなのか。ていうかよく知ってるな」

「学校だとお前は結構有名人だぞ。妹と揃ってな」

「お前のほうが有名だろうが。入学試験Sランクさん」

「……それはさっき言った能力のせいだな」

疲れたような笑顔を携えている。

今の顔は年齢が十歳くらい肥えたように見えたな。

「あ、アンタねえー。ふざけてんじゃないわよ」

電話を終えたアリアは肩を震わし、背後に鬼を召喚していた。
こわっ！ アリアは何でもできんのかよ。

「今の電話、理子だったわよね。言っただわよね、注意しろって」

「だから、お前に渡したんだろ」

「理子言ってたわよ『きょーくんの彼女でーすっ』って。どういうことかしら」

あいつ、かつてに電話の相手変えたからってへそでもまげたのか。
厄介なことじゃがって。

拳を固めながら歩いてくる。キンジに顔を向けるとそっぽを向かれた。

どいつもこいつも敵だらけだなーおい。

「それは、あいつの小粋なジョークだろ。大人の女性のアリアなら
そのくらい流してやれよ」

「お、大人の女性？」

「そうだ、なあ、キンジ」

「お、おう」

俺はキンジの脚の肉を思いつきり捻り上げながら、笑顔で賛同を得る。

アリアは、騙されやすいのかそのままテンション高めてくるくる回り始めた。

よし、おーけーだ。

二十八話 体力測定2

翌日の武偵高では中間テストがあった。

午前是一般科目のテスト（かなりできたと自負している）午後はスポーツテスト受けている。

すでに8種目あるすべてを終わらした俺は悠々気ままに寝転がっている。

キンジと一緒に回っていたが、途中でアリアを遠くに見かけたので俺は逃げて今にいたる。

もうやることもないので、暇だ。

ふと、考える。

俺は、この学校でなんだかんだやばい事件に巻き込まれているんじゃないだろうか。

キンジとアリアは何か知っているようだが、聞いても教えてくれそうにはない。

一番の謎はイ・ウーのことだ。

昨日アリアがキンジに教えたら存在を消されるなどといった冗談ではないようだった。俺の親父の仕事仲間が全力で追いかけてくるらしい。

戦えば確実に負ける、逃げるのなら余裕だろうな。

「きょーくーん！」

俺はなにやら甘ったるい匂いがしたので瞬間的に、横に寝転がって避けた。

「なんだ？ 峰」

「理子って呼ーんでっ」

甘えるように言ってくる。

さりげに俺に抱きついてきたので、

「呼んでやるから離れる。俺は、忙しいんだ」

「ふうーん。随分と暇してたみたいだよ？　アリアとキンジが仲が
いいから？」

「まあーな。二人の仲を壊すような無粋な男じゃないからな」

「なら、理子と付き合いおうーよお。理子の体はきょーくんの自由に
していいんだよ？」

そういつて体育着の胸元を広げるように引っ張り、自分の胸をア
ピールしてくる。

なんていうんだっけな。色仕掛けを専門とする学科があつたよな、
こいつそこでやっていけるだろ。

「お前は、なぜ俺のことを狙う？　キンジとアリアはお前と戦って
いるから実力は知っているだろうが。おまえは俺の実力を情報でし
か知らないだろ。なんで、そこまで俺を巻き込みたいんだ？」

「……よく考えてるな」

これが、裏理子か。キンジもよく合う言い方を思いつくな。
今までの可愛い、男うけしそうな声からいっぺんして低い声に。
俺にも自分の正体を隠すことはしないようだな。
前に屋上でみたから、知っているが随分と真逆だな。

「どっちが素だ？」

「はーてね。どっちでしょ？」

「こころ変えんな。どっちかにしてくれ。さっきの質問に答えろ」

「きょーくんの實力は生で見てるからしってるよ。まあ、昔のことだけど。それにイ・ウーにも届いてるしね」

「誰だ、この野郎。こちとら戦いに不慣れなのに、くそ」

そーいえばアリアに頼むの忘れてたな。
でも、頼みにくいな。

「そうだよなー。きょーくんは実戦が少ないもんね。なんだったら理子が戦い方教えてあげよつか？」

まるで、俺が考えていることを読んだようなタイミングだ。
読心術でもできるのか？

「……まあ、タダならな」

「理子の泥棒手伝ってくれるならいいよ？ ただし、戦闘以外も教えてあげちゃおっかな？ こっちのこととかね」

ちらつとまた胸をみせようとしてくる。

なんだ？ こっちって？

詳しくは分からないが、触れてはいけなさそうなので、無視しておこつ。

「俺はこの後キンジとテストを受けないといけないんだよ。だから、少し休ませてくれ」

「テスト？ ああ、探偵科の自由参加の？」

「そ、俺はこのままだと単位が危うくてな。あまり依頼とか受けてないし」

「へえー」

面白いものを見つけたとばかりに目を細める。

獣みたいだな。

俺は、確か否定したはずなのにいまだに横に座っている理子を見無視して大した時間眠ることはできないが、眠りについた。

二十九話 講義

「それにしても女子が多いな」

キンジが嫌そうに呟く。

こいつはしょうがないか。俺だってあんまり女子が多いのは好きじゃない。

「一番後ろなら人いないからそこでいいだろ」

二人でプリントを受けとり、一番後ろに向かう。
暇な時間、プリントをみることにする。

『遺伝学』についてのDVDを見るようだ。そういえばキンジの能力は遺伝性らしいな。俺の能力は家族の誰にも遺伝していないので、突発性なのだろうな。

この世界に似たような能力の人間はいないと親父が言っていた。
超能力の一種らしい。白雪は鬼道術とやらで身体強化に似たようなことをしていた。が、正確にはことは分かっていない。

俺自身がそういう検査を嫌いで、自分の能力を公にさらさないように親父に頼んでいるのも原因の一つだな。

「ほらほら、皆さん。騒がないで着席してください」

講師の先生が手を叩きながら、声をあげる。

なんだか、弱そうな先生だな。武偵高には似合わない。いや、これが普通なのか。

武偵高の生徒は恐ろしい教師ばかりだから感覚が狂っているのかもしれない。

それにしても講師の先生はどうかであったことがあるような……

？

しかもかなり昔に。

「なるほどな……」

「なにが『なるほど』なんだ？」

「あの人、人気なんだよ女子に」

「だから、多いのか」

大変だな、イケメンの先生は。

それでも、何度か注意すると女子生徒たちもしぶしぶと席に座っていた。

俺はそれを絵画のように見ていたが、ふと、キンジの隣に誰かが座るのを見かけた。

同時に部屋が暗くなった。

「り、理子……なんでくるんだよっ」

キンジの慌てぶりは理解できないが、俺はそちらを無視してDV
Dに顔を向ける。

「ん……っ」

なんか二人のほうから変な声が聞こえる。

顔を向けると、なんだかピンク色空間が形成されていた。

理子の頭をひたすら撫でている。

「きよ、京助けてくれ」

小さいが、それでも慌てようが伝わる声をあげる。

「理子、もっとやっていいぞ。面白いから」

「あいあいさー！」

「煽るなっ」

キンジは、理子を見無視してDVDを見ようとしたので、俺はシャーペンを奪い理子に手渡す。

理子はそれを胸にしまいこんだ。

俺たちはぐつと親指をたてる。

「って、何してんだよっ！ お前とれよ」

キンジは涙目になりそうになりながらも俺の胸倉を掴む。

俺はそこにシャーペンを芯をださずに突きさしてやる。

「理子、そいつ欲求不満みたいで、俺をいじめるからどうにかしてきてくれ」

俺は一応キンジの事を思っているんだぞ。

女になれておかないと将来きつと大変になるだろう。

だから、理子を使いキンジの女嫌いを少しでも治してやろうと友達思いだな俺。

後付けだが。

「お前のシャーペン寄こせ」

「シャーペンがキンジに使われたくないって、どんまい」

俺はキンジの手が届かないように二人から距離をおく。

あたふたと慌てふためくキンジを見ているのは面白いなあ。

理子は、あれ、からかっているのか？ それとも本気？

本気だったら、面白いのに。ハーレムじゃん、今でも結構なハーレムだが。

俺は一人悠々とプリントの問題を終えると、暗い部屋に明かりが戻る。

そして、俺たちを見ている教師。

「な、なにをしているんですか？」

戸惑ったような、でも怒りを含んだ声だ。

「俺はなんの関わりもありませんから」

そういつてプリントを渡す。できれば始まるまえに感じた違和感を確かめたかったが、今はそんな空気ではない。

「理子も問題は全部とけてまーす！」

理子は俺と同様にプリントを渡した。

いつ解いたんだよ、手品師か。

俺たちはキンジをおいて逃げ出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4295v/>

緋弾のアリア 五分間の最強

2011年9月25日05時57分発行